
東方餓狼死狂伝

モーディス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方餓狼死狂伝

【Zコード】

Z8764L

【作者名】

モーデイス

【あらすじ】

空手団体・北辰館の一員、堤城平。彼は、丹波文七という猛者に負けて以来、今までよりも過酷なトレーニングを己に課していた。ある日の夕方、彼が無心にランニングしていると……？

幻想郷に呼ばれた餓狼

彼は、森の中にいた。

それがいつからだつたのか。

それさえも、彼にとつて定かではない。

彼は、いつも通りランニングをしていた。

体力を落とさぬため、そのためのランニング。

己に課したメニューを忠実にこなす。

ただひたすらストイックに、彼はそうしてきた。

だが、どういうことだらうか？

そこは彼のランニングコースには存在しない森だつた。

まあ『いつの間にか森にいた』という彼の感性にも疑問を持つべき

だろう。

とにかく、事実として彼は森にいた。

見も知らぬ、未知の森に。

そこが森だと気付き、彼は足を止めた。

ランニングの途中だつたため、体のクールダウンも兼ねて流してから。

安物のスニーカーが踏みしめるのは、やわらかな土の感触。

『森で走るのもいい練習になるかもな』と思つのは、彼だからだろう。

しかし、彼も一応人間だ。

そこが見覚えのない土地と分かり、軽く混乱した。

というよりも、混乱していたからこそ危機感を感じさせない思考を巡らせたのだ。

そう、軽くである。

『大変なことになつてゐる』という現状をある程度把握した彼は、とりあえず森から出ることにした。

早く森から抜け出して、通信手段なりを確保せねばならない。

もし県外などに来ていようものなら、会社に一報入れる必要がある。別段彼が必要な仕事もないが、だからといって無断欠勤していいわけではないのだから。

……ここまで来て、己の身を案じない人間も珍しい。

とにかく、彼は現状を開拓するために歩くことにした。

危険は承知だが、もともと森の中に来た経緯さえはつきりしていないのだ。

それに、彼にとって『多少の危険は危険ではない』のである。

正直なところ、クマくらいは殴り殺せる自信があるような人間だ。しかし、彼は重要なことを知らない。
人間以外の、彼の想像を超える生き物が、ココには存在していると
いうことを。

少しだけ森の中を歩いて、やや開けた土地を目の端に入れたところ
だった。

地面が……それなりに大きな湖の湖面が、太陽光を反射して輝いて
いる。

彼の地元ではなかなか見られないような、幻想的な光景だ。

そして、彼はココに来て初めて人間らしい者に遭遇する。

「あれ？ メイドじゃない人間がいる…」

と大声で言つて指をさす人物のは、堤の目から見ても少女にしか見えなかつた。

大して背丈もなく、小柄な彼と比較してもまだ小さい。

その立ち振る舞いからも、少女らしさ、というものが滲み出でていた。水色を基調としたワンピースは、森の中にも映えている。清潔感は十分にあり、森の中にしては小奇麗な恰好であった。

というのが、堤城平が彼女を最初に目にした時の感想である。

至つて視力に問題のない彼だが『メイド』という聞きなれない単語には首をかしげた。

一度、会社の食堂でつけっぱなしだったＴＶで特集を見たことがあるようないような。

その程度の知識であるため、彼はすぐに熟考するのをあきらめた。

その少女は、無防備に堤に近寄つてくる。

普通だつたら、空手着を着た筋骨隆々とした男には近づいてこないだろう。

しかも、つぶらな瞳と小さな体躯のおかげで、余計不気味に見えるのだ。

そんなことくらいは承知している堤であるからこそ、逃げられても不思議はないと覚悟できていた。

もちろん、逃げられたら付かず離れずの距離をとつて追跡するつもりだつたが。

とりあえずその心配はないとわかつて、堤は幾分か警戒を解いた。

「うわ、汗くさい！ 水浴びくらいしなよー！」

それよりも、彼にとつて重要なのは。

日本人からはやや離れた造形をした少女が日本語を話せるといつことだ。

森の結構奥に来るくらいなのだから、地理にも明るいに違いない。であるなら、道を聞くことができるのである。

「すまないが、人里に行く道を教えてはくれないか」

「はあ？ なんでアタイが汗くさい人間の道案内なんかしなきゃいけないのよ」

一刀両断。

すっぱりと切り捨てられた。

だが、それでは困る。

早く連絡を入れねば、明日のシフトに大きく影響してしまつ。

「頼む。人里でなくともいい。人が住んでいるところがあれば、そこに案内してくれ」

「だあかあらあ、 なんでアタイが」

嫌な顔をして渋る少女を尻目に、堤は懐に右手を突っ込んだ。
その仕草に少女は一瞬警戒の色を見せたが、懐から出てきた堤の手
の中のものを見て警戒を解いた。

ところで、堤城平は無茶をすることが多い。
仕事では1人で半トンを超える土嚢を人力で、しかも一度に運んだ
り。
体の怪我が治りきらぬ内に肉体労働に復帰したり。
己の体を平時から限界以上に追い込んでいる男だ。

ガス欠になつて倒れかけた、あるいは倒れたことも少なからずある。

普段から、巾着袋の中に入れて持ち歩いているのだ。
飴玉を、5つほど。

「これくらいしかればできんが、頼めないだろつか」

「そつ……そ、そこまで言つなら仕方ないわね!」

堤の右手の中にあつた飴玉を全て奪うと、手招きもせずに歩きだした。

『ついていけばいいのか?』と聞くと、何かを口に呑んでいるよう
な声で『そうよー』と返ってきた。

どうやら、この少女についていけば何とかなるようだ。
そうやって安心した堤は、ようやく気がついた。

少女が、宙に浮いて移動していくところだ。

「へえ。なんか変わった格好してると思つたら、外から来たんだ」

「まあ、そういうことになるな」

歩きだして、かれこれ1時間になるだろうか。
飴玉を完食したチルノが暇を持て余し、堤に話しかけてきた。

何より興味をもたれたのは、どうして森にいたのか。

彼は『走つてたらいつの間にかいた』と事実を説明したところ『あ
んたバカねえ』と鼻で笑われた。

チルノ曰く、といふか、チルノが話していた情報を整理すると、こ
ういうことになる。

- ・チルノは人間ではなく、妖精である。
- ・チルノは最強だが、たまに足元をすくわれて負ける。

・ 基本的に人間と妖怪は友好関係はない。

・ 今向かつてている『コウマカン』は、吸血鬼が主である。

・ 『コウマカン』には人間のメイドがいて、非常に有能。

・ 『コウマカン』は妖怪だらけだが、基本的には人間に友好。

貴重であつたのは、今自分のいる土地には『妖怪』と呼ばれる生き物がいること。

そして、基本的には妖怪と人間は相成れないということだ。

堤が最初に考えていたのは『人間と妖怪が戦争をしている』ということだつたが、辻褄が合わない。

それが日常化していれば、チルノは堤から逃げるか、逆に襲いかかるところである、
彼女の態度から一切の恐れが感じられないことからも、その仮定は容易に否定された。

次に考えたのが『妖怪が人間を奴隸として扱っている』ということ。

これであれば、今のところの情報からは否定される要素はない。

『コウマカン』にはメイドという奴隸と解釈しても差支えない人間がいる。

そして『コウマカン』の妖怪が人間に友好的というのも、人間を奴隸としていても通用する。

他のグループよりも人間を丁寧に扱つていれば、それは友好的と言つても間違いではない。

何よりこの論を後押しするのが、チルノの態度に他ならない。

先ほどから堤を……人間を軽く見るような発言が多い。

もともと高飛車なのかもしれないが、それにしたって過剰だ。

『や二じらへんの人間なら一捻り』なんていうあたりからも分かる。

よつて、この時点では彼は警戒心を十分に持つていた。
いくら先導するのが可愛らしい少女だからと言つて、油断はならない。

その少女が宙を浮いているのもさうだし、自分が『コウマカン』で
厚遇されるとは限らないのだ。

それなりの覚悟を以つて、堤は歩を進めていた。

ちなみに、彼はまだ『ゲンソウキョウ』という場所のことに関して
は納得していない。

まず何より、日本国内ではあらうが、場所がどこであるかが全くわ
からないということ。

少なくとも着手県内か、もしくはその周囲の県であると彼は推測し
ている。

が、その推測も田の前の少女を見てしまつて、ビリも揺らいでしま
う。

彼女の話からするに、空を飛ぶくらいは珍しいことではないらしい
といふ点。

その点に関しても、未だに納得はいかなかつた。

いや、納得いかないのではなく、受け入れられないのだ。

あまりに現実……今までの現実から乖離した現象が起きている。

そのことに脳が追いつかず、現状の受け入れを拒否している。

もし『岩を碎く』などであれば、彼は驚かなかつたろう。

彼が到達している領域からはまだ遠いが、できる人間が彼の近くにいたのだ。

そういうつた意味では、むしろ超能力じみた『飛行』をする少女の方が、彼にとつて斬新である。

「お～い、ツツミー 着いたよ～！」

その声で我に返つた堤城平。

彼がチルノのいる方を見ると、派手な色彩の建物が目に入った。

赤というよりは紅。

紅を基調としたというより、紅で外装のほとんどが占められていた。門の前に立つてゐる女性の髪の色までもが紅という始末である。その統一性の高さに目を奪われ『またね～！』というチルノの声も聞こえなかつた。

そのとき彼は、深く考へていなかつた。

『ここで電話を借りよう』とか、あとは『謝礼はどうしようか』と

か。

せいぜいがその程度のことであり、奇抜ではあるが建築物を発見したことで安心してしまった。

日は傾き始め、夕闇が迫る。

真実を知らぬ彼は『帰りはタクシーでも使うか』などと呑気に考えていた。

虎子ノ序章・長い寄り道

伊良子清玄。

彼奴を討てば、万事丸く收まる。

お家こそ守れなかつたが、三重だけは守り抜く。

そのためにも、藤木は伊良子を討ち果たさねばならなかつた。

だが。

裏切られた。

裏切られたのだ。

三重は、伊良子と心中するためにな。

死のう。

三重が命を絶つた瞬間、彼は思った。

上覧試合がすべて片付いたら、自ら命を絶つ。

そう決心して、その場から去つた。

それが、新たな始まりであった。

むーさん、むーさん。

その童歌が、耳から離れない。

呪いのようにまとわりつき、耳の奥底に張り付く。

まるで、様々な亡靈が藤木の耳に取り付いているかのようだつた。大局から考えれば、彼もまた、いくによつて人生を狂わせた男である。

いくに関わつたがために、己の左腕と存在意義を失つたのだから。

その格好は、下級武士のそれと同じであつた。

礼装でも何でもない、ただの安袴。

だだ1つ違いがあるならば、彼の腰に差されている大小のみだ。

『虎殺し七丁念仏』は、もう手元にない。

伊良子を倒すときにも『晦まし』を使って投げた際に、折られてしまつたのだ。

いや、折られるとわかつて投げたのだ。

今、藤木の腰に刺さつてるのは、無銘の大小。業物を揃える金もなかつたため、適當なものを見つくるつてきた結果だ。

どれほど歩いただろうか。

ふと周囲に視線をめぐらすと、そこは巨大な庭園だった。

彼が上覧試合をした場所よりもはるかに広く、そして、死の匂いに満ちている。

だが、その匂いが爽やかなのだ。

血生臭さや腐臭とは無縁の、春先の桜のような、あるやなしやの微妙な匂い。

その匂いが、藤木の足を止めたのかもしれない。

右へ左へ視線を巡らし、「口がどこにいるのかと確かめようとした。だが、左を見れど屋敷の縁側のようなものが、右を見れど遠くに堀があるだけだ。

「すいません、少々よろしいでしょうか？」

そこで初めて、藤木は前を見た。

見れば、そこには年端もいかぬような少女がいるではないか。背丈にして、彼より1尺近くは低いであろうか。

その少女が、身の丈に合わないような太刀を一本下げている。

もしや上覧試合の者が、とも考えた。

女性の参加者が1人いたはずだった。

が、すぐに思い違いだと認識する。

その女性は、薙刀術の使い手であつたからだ。

そしてなにより、藤木は城下から遠ざかっていったはずなのだから。

藤木の無言を、質問してもよいと解釈したようだ。

やけに肌の色の白い少女は、刀に手もかけずに藤木に問うた。

「あの、この時期は桜は咲いていませんが……幽々子様に御用でしょうか？」

このときも、藤木は何も答えなかつた。

いや、正確に言えば何も答えることができなかつた。

それは、田の前の少女から半端な生氣しか感じなかつたからではない。

それは、目の前の少女が美しかつたからでもない。

それは、失われた己の左腕に微塵も気を取られない少女がいるからではない。

それは、単に思考が働いていなかつたからではない。

感じたのだ。

己の師、岩本虎眼を。

兄弟子である、牛股権左衛門を。

字を教えてくれた、興津三十郎を。

虎子であつた、宗像、山崎、丸子、涼ノ介を。

そう思つた時には、駆け出していた。

どこへ、ではない。

いてもたつてもいられず、駆け出したのだ。

「ちよ、待つてくださいー！」

少女の制止もどこ吹く風。

藤木は、その庭園を縦横無尽に駆け回った。

己の不甲斐なさを笑う、宗像と丸子と山崎。

藤木を前に流した涙の意味を伝える、涼ノ介。

裏切りを悔いながらも、それも一つの正しさだったと言ひ、興津。

虎眼流の無念を果たしたことを心の底から喜んでくれている、牛股。

そして。

『ようやくじとげてくれた』と、過去に一度だけ見させてくれた笑みを浮かべてくれる虎眼。

誰もおらず、そして誰もがいる。

そんな不思議な感覚が、藤木の中に生じる。

全ての想いに心中で言葉を返し、知らずの内に涙していた。

藤木の様子から何かを感じ取った妖夢が、藤木を白玉楼に招いた。妖夢の権限で招くことを許されている客間までだつたが、それで充分だつた。

藤木の腰に刺さつてゐる大小と、失われた左腕。

かなり前に白玉楼に来た、成仏できぬ剣士の集団の靈。それだけで、彼らの間にどのような関係があるかには察しがついた。が、細かい関係まではわからない。

差支えなれば、ということで、茶菓子と茶を出して腰を据えてもらつた。

それは、聞くに奇怪な物語であった。

たどたどしくも語られるそれは、魂魄妖夢をしても奇天烈な話であった。

貧農の三男として生を受け、粗末に扱われた日々。

剣豪・岩本虎眼に拾われ、侍として新たな生を受けたこと。虎子として己を磨いていった、仲間たちとの想い出。怨敵、伊良子清玄との邂逅。虎眼を裏切った伊良子への仕置き。

そして始まつた、伊良子の復讐。

次々と命を借り取られる虎子たち。

ついに伊良子の剣に倒れる虎眼。

仇打ちに挑み、秘策破れて敗北する藤木。

己を捨ててまで立ち向かつたが、願い叶わなかつた牛股。

来るべき、再戦の日。

手に入れた勝利。

その勝利の喜びと同時に、大切なものを失つた。

その全てが、並みの人間の人生を遥かに凌ぐ密度だつた。

「そうだつたんですね……」

藤木に言葉はない。

無言の肯定、というわけでもなく、ただただ茫然自失しているのだ。
死したる者と再び会いまみえるなど、藤木の思想の中には存在しなかつた。

それゆえに、今の現とも幻想ともつかぬ事態は、藤木の心中を混乱せしめていた。

「それで、どうやつてここへ？」

「わかりませぬ」

妖夢の言葉に短く返す藤木の胸の内は如何なるものか。表情こそ変わらぬものの、そこには様々な思いが見て取れた。安堵、困惑、失望、覚悟、焦燥、驚愕。

一言では語りつくせぬそれらが混ざり合い、顔ではなく目に宿る。感受性の高い妖夢だからこそ、彼の想いを読み取れたのかも知れない。

「……これから、どうするつもりですか？」

「既に死したる身なれば、腹を切りたく思います」

その考えに、納得できぬ妖夢ではない。己が使命を全うできなかつたのであれば、むしろ切腹は望むところである。

切腹と言ひ形で責任を取らせてもらひるのは、武士としては譲れなのだ。
そう、武士としては。

「藤木さん」

少しの間をおいて、決心したような様子で妖夢が声をかける。藤木は相も変わらず無言で坐し、瞬きすらも惜しんでこよみつな眞合だ。

いや、そんな藤木を見て、妖夢は決心したに違いない。
そうして始まったのだ。

「 よりしければ、少し寄り道しませんか？」

藤木の、長い長い寄り道が。

茶の間にいたのは、西行寺幽々子だった。
いつも通り、ゆるい雰囲気を保つたままのんびりと茶菓子を口にしている。
そんな彼女の机を挟んだ向かいには、真逆の様子をした男と見慣れた庭師が一人ずつ。
どちらも背筋をピシッと伸ばして、キチッと正座をしていた。

「 ゆゆ様。」こちらが先ほどお伝えしました……

「虎眼流、藤木源之助に御座います」

「西行寺 幽々子よ。……まあ、樂こしなさいな」

茶菓子を口に運びながら、朗らかな笑顔で幽々子は告げた。
その弛緩し切つた様子を前にして、藤木のピリピリした気配は変わらない。

なんというか、一歩間違つたら斬りかかってきそうな雰囲気だ。
それくらい、必要以上に張りつめた空気を藤木は作りだしていた。

「それで妖夢。彼を召し使えたいといつのぞどうぞ」とかじりへ。」

幽々子の口は、笑つていなかつた。

柔和な雰囲気を持つてはいるが、笑つてはいない。

それはつまり、喜怒哀楽のいすれもが欠如しているといつことだ。

今この場において、幽々子にそれは存在しない。

ただ妖夢に必要なことを問い合わせ、答えをせることのみに関心がある。

「恐れながら」

そういうて、妖夢は幽々子に頭を下げる。

今の『恐れながら』に含まれる意味が、全てその挙動に現れていた。

恐れながら、私の案をお聞きください。

恐れながら、私の身勝手な行動をお許しください。

恐れながら、無礼な振る舞いをさせていただきます。

その全てを、幽々子が感じ取れたかどうかはわからない。
が、幽々子は何も言わない。

それは、彼らの間において『進言を許す』という意味を持つ。
それに従い、妖夢は顔を上げ。

「私の体が持たないんですよ!」

その言葉と同時に、ダンと足を踏み鳴らして妖夢が立ちあがった。
藤木が目を丸くするほど怒声である。

それでも正面を睨んだままのは、彼の性格ゆえか。
ともかく、上から目線でものを言っていた幽々子が狼狽していた。

「あ、あの、その……妖夢?」

「妖夢? ジヤありません! ロロ最近桜もないのに宴会宴会宴会
宴会!」

何人か手伝ってくれてるからまだしも、そろそろ私も限界なんで
す!」

目の端に涙を浮かべながら、小さな腕を大きく振り、己の怒りをあ
らわにする。

主従関係が甘い2人の間とはいえ、これは珍しいことだった。

たまにこういうことはあるが、それが今であるとは幽々子にとって

も想定外である。

「だからってね、隻腕の武士を拾つてどうするつもり?」

幽々子は、ちょっとビクビクしながら聞く。

いつもはキッチリ主従関係を維持しようとすると妖夢が、口うるさいばかりに声を荒げるのだ。

いつまで経つても慣れないのだが、今日はいつも以上の気迫があった。

「……幽々子様、それ、本氣で言つてます?」

『隻腕』といひ言葉を聞いて、妖夢の目がスッと細まる。

その目は、殺意や敵意とは無関係だ。

関係があるものは、叱責である。

では、妖夢が幽々子の何を責めているのか?

「冗談よ、冗談。ただ、白玉楼に男が居着くつていつのは……」

今までの怯えが嘘のように、カラカラと笑い出す幽々子。

先ほどの彼女が演技であつたかのような笑いようだ。
その様子を見てか、この密間に来て初めて藤木の顔に疑問が浮かんだ。

そして、それを楽しむかのように幽々子はまた一笑する。

「ああ、藤木さん。置いてきぼりにして」「みんなさいね。

実は、貴方の師匠や仲間たちには、私の話相手をしてもらつたこ

とがあるのよ」

『あんまり珍しい話だから』と付け加えるも、源之助の耳には入つてこない。

それは初耳だつた。

というよりも、そんなことを確認している暇は藤木になかつた。いや、死して靈と化した虎眼たちにもなかつただろう。

「それで、一応とつておいたものがあるのよ」

幽々子が何もない眼前の空間に手をかざす。
柔らかく、何かを撫ぜるかのような艶めかしい手つきだ。
彼女が手をかざしたところに、一つの幽靈が現れる。
それは、世にも珍しい、左腕の幽靈であつた。

「貴方の左腕の幽靈よ」

左腕。

そう、彼の左腕だつた。

どうして幽々子が藤木の左腕の幽靈を持っていたのか。
それは、全くの偶然。

幽々子の仕事の一つに、靈の管理がある。

三途の川の死神ほどではないが、靈と話すこともある。その靈の一つ……牛股権左衛門の靈から、不思議な事を聞かれたのだ。

『ここに藤木という男が来ていないか』と。

聞けば、その名は弟弟子のものであるといつ。

魂を浴びせるかのような魔剣によって、左腕を斬り落とされたと。その魔剣を放った男を殺し損ねたのが自分であるとも告げた。幽々子が牛股からそんな話を聞いた、その2日後のことだ。

藤木の左腕が、白玉楼に迷い込んだのは。

「お断りいたします」

「駄目よ」

藤木の反目を僅かも許さず、幽々子はキツく言い放った。

その心中深くは察しかねるが、概ねの機微であれば妖夢にも理解できる。

藤木は、さつと両方とも断つたのだろう。

白玉楼で呪し使えること、そして、己の左腕を取り戻すこと。

比重が大きいのは、左腕を取り戻すことに違いない。

己の過ちを真摯に受け止めてしまう、真面目すぎる彼の性からすれば至極当然と言える。

屈辱でさえも、彼は無かつたことにできないのだ。

幽々子は、もう呪し使える気なのである。

普段は万事どうでもよいかのよつに振舞つてゐるが、頑としたときは譲らない。

彼女としても思ひとこひはあるよつで、藤木を手元に置いておきたいのだらう。

牛股達の話を聞く限り、妖夢を凌駕する剣術の技前を持つこと。精神・肉体の両面での妖夢の修行のために、彼が必要だったに違いない。

「岩本虎眼から、正式に身柄を預かつてゐるのだから。

左腕を残しておいたのも、虎眼から頼まれたことなの」

だから、と幽々子は続ける。

否。

幽々子に続いた。

「貴方は虎の中の虎に御座います

その涼之介に、山崎が続いた。

「主が生きておるつむは、虎眼流は生き続ける」

その山崎に、丸子が続いた。

「胸を張りなされ、若先生」

その丸子に、宗像が続いた。

「案外ココも、慣れれば楽しいもんだぞ」

その宗像に、興津が続いた。

「虎眼流ほど厳しくもないしな」

その興津に、牛股が続いた。

「虎眼流を死なせるには早いぞ、源之助」

その牛股に、虎眼が続いた。

「藤木源之助、西行寺幽々子に仕えよ。

岩本虎眼、藤木源之助への最後の命じや」

そうして、藤木の寄り道は始まつたのだ。

既に人にあらず、剣鬼と化した藤木源之助の、長い長い寄り道が。

フォークリフトはいらないわね

「あら？　こんな時間に珍しい」

少し長くなつた銀の前髪の先を指でいじりながら、彼女は館の外を眺めていた。

彼女の能力によつて外観以上の広さを持つ『紅魔館』の廊下から。そろそろ主を起こす時間であるため、主の部屋に向かつっていたのが……。

白黒の魔法使いと紅白の巫女を除いては、極めて珍しい人間の客人であつた。

汗で濡れた白い胴着を着ているが、妖怪ハンターの類ではないだろう。

件の客人の纏つている空氣は、明らかに妖怪ハンターとは違つ。過去に一度『コガソリュウ』を名乗る武芸者が来たが、その武芸者に近い雰囲気を持っている。

彼は腕試しで来たらしが、何故か小悪魔を倒した時点で迎えが来て帰つてしまつた。

無表情で『これからござれる』という彼を、魂魄妖夢が宥めていたのは懐かしい記憶だ。

あのときは夜明けに差し迫つていたが、今は夕暮れを迎えて夜に至

るつとしている。

この館の主たる吸血鬼も、駄々をこねながら目覚めるところだ。

これは、ちょうどいと言つてもいいのかもしない。

何か運命が働いたのだろう。

彼女は手近な妖精メイドに『お客様に湯と衣服と香水を用意しておきなさい』と伝える。

無論、珍しい男性客であるということも、身長に比して頑強な体だ

ということも。

そして『お客様をお迎えするよひ』と言ひのりも忘れなかつた。

変わった人間だ。

紅美鈴が堤城平という人間に抱いた、最初の感想だった。

まず、服装が変わっている。

パチュリーの図書館で見せてもらつた『大山倍達』が着ていた服と同じだ。

当人とは似ても似つかないが、その『空手着』という服装は寸分と違わない。

胸元に入つている『北辰館』という文字も、相違点と言えば相違点だつた。

そして、風体が変わっている。

身長は彼女よりいくらか高い程度だが、その筋量が尋常ではない。小さなフレームに無理やり巨大な粘土を張り付けたような体をしているのだ。

丸みを帯びてゐるよう見えるのも、その異様な筋肉のせいに違いない。

あとはまあ、ちょっとつぶらな瞳が不似合いだつたが、そこには大して気にならなかつた。

氣配が妖怪であればリスの流れを汲む妖怪だと思うところだが、男からは人間の氣配しかしてこない。

つまるところ単に顔つきの問題であるので、彼女は特に感想を抱かなかつたのだ。

「すまないが、電話を貸してくれないか」

ジャブもフェイントもなく、ストレートからだつた。

普通は軽い挨拶などしそうなものだが、いきなり要件からである。彼としては『すまないが』の前置きがあるだけでも相当気を使つているつもりだ。

だが、それは常人から見ても無礼の部類に入るような振る舞いである。

考えても見て欲しい。

見ず知らずの人間が玄関先に来て、突然『電話を貸してくれないか』である。

不愉快とかそれ以前に、怪しんで警察に電話しかねないとこりだ。

が、そこは紅美鈴。

目の前の相手が人間で、しかも外界から来たようだと言つこともあり、特に気にした様子はない。

彼女が穩健派の妖怪であるという事実も、少なからず影響しているに違いない。

もし風見幽花などだつたら、彼女の育てている植物の肥やしになつてゐるところだ。

「黒電話ならありますけど……館内に2ヶ所しかないし、中でしか使えないですよ？」

その2ヶ所といつのも、主の部屋とメイド長の部屋だ。

それは『主が心細くなつたときにはメイド長に傍こいつてもひりつためにのみ使用される。

用件はまちまちで『急にノドが渴いた』『布団が湿つぽい』などがある。

過去に何度も『寂しくて一人で寝れないから』といつも電話があつたとかなかつたとか。

とにかく、美鈴には何のために電話を借りたいかが理解できなかつた。

「そうか」

そういうと、男はその場に……門番の彼女の前で仁王立ちを始めた。美鈴の割と正確な体内時計が1分・2分と時間が過ぎていくのを伝える。

5分を過ぎてもピクリとも動かず、10分を過ぎたころには再び話しかけていた。

「あの、『用件を挿い摘んで説明して頂けますか?』

「すまんが、自分の現状を把握しかねてゐるくらいだ。説明は難しい」

「……そうですか」

すぐにあせりめた。

そこから更に20分経過したところで、わりと新入りの妖精メイドが美鈴のところまで来た。

『冗談抜きで息が詰まりそうであったため、彼女は心底ほつとしていた。

しかし、妖精メイドからの伝言を聞いて、『ほつ』が『はあ～』に変わりそうになつた。

それが、紅美鈴と堤城平の最初の出会いであった。

最初は『そこまで世話にはなれない』といつていた堤だったが。

『汗臭いので汗くらい流してください』とか。

『その汗の染み込んだ衣装でお嬢様の前に出るつもりですか？』とか。

『ハツキリ言いますけど、不潔なので着替えてください』とか。

フロフロのドレスのような服を着た少女らに言われて観念した。

……「こで『メイド服』が出てこないのは、堤の頭が古いからかもしれない。

というわけで、汗臭い空手着を脱ぎ、体にこびり付いていた汗の残滓を落とした。

シャンプーを控えめに使つて頭を洗い、やたら香りのいい石鹼で体を洗う。

大衆浴場のような風呂であるため湯船もあつたが、申し訳なさもあり浸からなかつた。

本当は体が冷え切つているため温めた方がいいのだが、堤はそれよりも気遣いを優先した。

そして風呂からあがると、そこにはもう服が用意してあつた。
脱衣所の出入り口の扉が鳴つたよつた気がしたが、気にしないことにした。

服装は、彼の着慣れないパジャマだった。

いや、パジャマなのだが、家中なら歩き回つても許されるデザインだ。

レースの生地が少しばかりゴワゴワして不快だったが、汗臭い空手着よりはマシかもしない。

青を基調とした単色のパジャマで、上下ともに少しばかり薄手である。

サイズがなかつたのか、今わつき裾上げされたような跡が見受けられた。

突然の規格外の体をした客に会わせてのことだらう。

脱衣所から出ると、先ほどの少女たちと同じような恰好をした少女がいた。

門番くらい高い身長と銀色の髪が特徴的だ。

彼女こそ、メイド長である十六夜咲夜である。

人間としても割と際立つ美貌をしている彼女だが、堤の琴線には今のところ触れない。

少し見つめられているので『やだ、もしかして気になってる?』などと思ったのも束の間。

2分も3分も立ち尽くしている堤を見て、勘違いをしていたということに気づかれる。

自分の思い上がりに呆れた咲夜は、一つ咳払いして会話の間を取りなおした。

「失礼します、堤様。お疲れのところ申し訳ありませんが、お嬢様の部屋まで来ていただきます」

そこは疑問符すら含まれていなかつた。
ただ淡々と伝えるべきことを伝える。
そういう表現が似つかわしい動作だ。
まつとうな客人として扱ってはいけない、ということだらう。

堤もそれは心得ていた。

彼自身がまつとうな客人でないことも、失礼に失礼を重ねていることも。

多少なりとも館の主と眼前の女性の怒りを買っているのではないかということも。

だから、彼は文句一つ言わなかつた。

「わかつた」

「では、じぢりへ」

それにして、本当にリストみたいな目をしている。
咲夜は心底そう思った。

愛嬌のある瞳ではあるが、その他の外見と見事にミスマッチしている。

そんな彼女の感想と全く同じ話題が妖精メイドの間で伝まっていたのだが。

まあ、それはまた別の話と言ひひととで。

「それと、ツツミ様。お嬢様とお会いになる前に一つ注意を

「なんだ」

突然足を止めて振り返る咲夜。

その目は真摯に堤を見つめており、彼女の真剣さが伝わってくる。これはただならぬ用件に違いないと身構えた堤に、彼女は調子を抑えた声で告げた。

「私が……」

「よつひや、紅魔館へ」

仰々しく足を組んで、絡めた己の指を胸元で弄んでいる。

その目は外見と不相応な艶めかしさを宿し、その趣味のものなら飛びついて行きそうだ。

だが、幸か不幸か堤城平は幼女どころか女性に興味を大して持っていない。

その人生の大半を空手に捧げてきたのだから、当然といえば当然だ

るつ。

正直なところ、田の前の幼女が背伸びしたポーズをとる理由が理解できていなかつた。

ちなみに、これは彼女が5年の時間を要して築き上げたポーズである。

曰く『カリスマが滲み出でてくるよつな』とのことだが、分相応とは言い難い。

普通に挨拶した方が決まつているのだが、誰もそのことを指摘してくれなかつたのだろう。

自信満々、余裕たっぷりにレミコア・スカーレットは構えていた。

沈黙。

沈黙。

耐えがたい沈黙が、1分と少し続いた。

「……で、ツシマ。貴方はこの吸血鬼の館にどのような用があるのかしら？」

口元の笑みを崩さず、足を組みかえつつ堤に問うた。

『どうして反応がないの…?』 とこり気持ちは、さうにか心の奥に
しまいこんだ。

もちろん、咲夜が彼女の背後で必死に笑いを噛み殺しているのには
微塵も気づかない。

「外部との連絡手段が欲しい。勤め先に連絡を入れたいのでな

対する堤の返事も、極めて簡潔なものだった。

要は通信機の類を貸してほしいということである。

「あなたはどうやら、幻想郷がどうこうとか理解できていないと
ようね」

「その通りだ」

堤の愚直さが、レミリアには痛かった。
自分のペースに持ち込もうにも、皮肉さえも受け流してしまつ。
せっかく疑問を呈したり食つて掛ってきたところを嗜める計画が台
無しだ。

動搖を心の奥に仕舞いながら、レミリアは言葉を続けた。

「幻想郷といふのは、一種の異世界。

一重の結界によつて常世から隔離された、貴方の知つてゐる世界

と似て非なる世界。

人間と同じように妖怪が闊歩し、妖怪が人間を襲う、アヤカシ達にとつての聖地でもある。

そんな世界に、貴方は来てしまったのよ……ツツミ・ジョウヘイ。そして貴方は、その幻想郷でも指折りの力を持つ吸血鬼の前にいるの』

怪しげな笑みを浮かべて見せるが、堤はやはりピクリともしなかつた。

表情にも変化がなければ、何かアクションを見せるわけでもない。ただそこで、レミリアが言つてることを聞いているだけだった。

「あの……ピックリしたりしないの？『吸血鬼だー！』とか」

「チルノが浮いているのを見たからな。もう大抵のことでは驚かん」
チルノの飛行』』ときと自分の正体をならべられたことにも腹は立つが。

それ以上に、堤の落ち着きよう立つ。

吸血鬼が、永遠に紅い幼な月たるレミリア・スカーレットが目の前にいるのに。

驚きも慌てもせず、当然のように会話しているのだ。

「いいこと、堤。吸血鬼とは、幻想郷でも指折りの実力を持つ種よ。

普段は人間の生き血を啜つて糧として、月が照らす永遠の夜を生きる……

「それはつまり、俺を餌にしようとか?」

「え? いや……そうじやないけど」

「ならいい」

面目丸潰れである。

レミリアは、ここまで堤の肝が据わっているとは思わなかつた。同種である人間が餌になつてゐるという事実に驚きもせず、冷静に対処しているのだ。

不思議と言うよりも、吸血鬼の彼女をして不気味な存在だつた。

間。

間。

間。

一刻一刻と時間が過ぎていき、入れたての紅茶が冷え切らうとしていた。

レミリアの心は焦燥一色で占められ、もはやまともな思考能力も残っていない。

とりあえず脳味噌の片隅に『カリスマ』といつ単語が踊っているだけだ。

500年生きた脳味噌は上手く回らないのに、田ばかりはこじらとばかりに回り出す。

……ここ数年、威儀がなくなってきたといつ尊が立ったのがいけないのだろう。

「堤様、いかがなさいましたか？」

と、咲夜が助け船を出す。
そこですかさず、レミリアは尊大な態度を取った。

「咲夜。彼は今、この私と話してくるのよ。出過ぎたマネはよしなさい」

内心では『ナイスフォロー』とか思ってるクセに、よくもまあそんな言葉が口をつく。

まあ、彼女の内心に関しては館に勤めている者なら概ね把握できるところである。

「すまん」

「あら？ 何故貴方が謝るのかしら？」

「今までに感じたことのないカリスマを前にして、言葉がうまく出てこなかつた」

今間違いなく、嬉しそうな顔で『え？』って言った。

堤にもそれくらいのことはわかり、ということは咲夜も知るところである。

そんな顔をしていたのを知らないのは、残念なことに彼女自身であった。

未だににやける口元にも気がつかず、カリスマなどどこへやら。外見相応の得意げな調子で、堤に対して口を開いた。

「そう、ならしかたないわ」

その声の、嬉しそうなこと。

あまりに嬉しそうな顔をするので、彼は少しばかりの罪悪感に苛まれた。

そもそも先の発言、堤にしてはおかしいのだ。

彼は少なくとも2人、レミリアをはるかに上回るカリスマの持ち主を知っている。

1人は北辰館の館長・松尾象山、もう1人は東洋プロレスの社長・グレーート巽。

この2人が、彼にとつては圧倒的に強いカリスマを持っていた。

これを仕組んだのは咲夜だ。

彼女はレミリアの前に堤を連れてくる際に、こいつ言ったのだ。

「私が貴方に話しかけたら『カリスマが強すぎて言葉が見つかならなかつた』と言つてください」

と。

多少咲夜の指定とは違つた言葉だつたが、逆にそれが効果的だつた。

堤城平の言葉で言つたからこそ、レミリアは信じたのだ。

「さつきも説明したけど、もう帰れないわ。もちろん、連絡も取れ
ない」

その事実を突き付けられた、彼の心境はいかほどのものか。

少し俯いたまま、堤は黙りこくつてしまつ。

ただでさえ状況が整理できていなかつたのに、更にその上づつにもならないと言われたのだ。

仮にそれが「冗談であつたとしても、彼の心へのダメージは計り知れないだろう。

丸々10分経過したところで、ようやく堤が一言だけ発した。

「……そうか」

人間らしさが宿つた堤の声を、彼女たちは初めて聞いた。
その声の中にあるのは、未練という感情だった。

彼は、外の世界に多くはないものを残してきた。

己の家族、己の友人、己の会社、己の財産。

そして、己の生きる目的もある『戦い』を残してきました。
その未練がましさが、堤の声に宿つた感情である。

「やべ、そういう『運命』だったのよ」

運命、という言葉を少しだけ強調するレミリア。

多少の憐れみは含まれていたが、そこに一切の容赦はなかつた。

遅かれ早かれ伝えねばならない事実なのだ。

少なくとも、原因はどうあれ堤が外の世界に帰れないということは。

1時間ほど経つたであろうか。

咲夜が2度紅茶を入れ直した時のことだ。

レミコアは暗い雰囲気を少しでも和らげるべく、本題に入った。もともと、カリスマの誇示やら何やらはオマケみたいなものだったのだ。

本当の要件は、ようやく彼女の口から語られた。

「やうね。良かったら、しばらくここで働かないかしら」

堤は答えない。

彼にしては珍しく、打ちひしがれているのだ。
外の世界から来た人間は生きている限り帰れるということを知った
ら、彼は余計落胆するだろう。

何せ、彼は、どうあがいても帰ることができないのだから。
そのような運命に巻き込まれて、普通ではなくなってしまったのだ。
うつむいたまま拳を固く握ると、そのまま押し黙ってしまう。

「メイドは十分にいるんだけどね、男手の欲しい仕事も多いのよ

そんな堤の様子を無視して、先ほどまでと違った様子で語りかけるレミリア。

今の彼女の口調は気の置けない使用人に対するそれと同じだが、堤はそれを知る由もない。

辛うじて会話の内容は耳に入つていたが、混乱とショックで頭が働いていなかつた。

口が開かれることなどはもちろんなく、ほんの少しの静寂が部屋を支配した。

「俺が人並みにできるのは、荷物を運ぶ」とと空手くらいだ。あとは簡単な料理と補修ならできる」

口をついたのは、頭の中と関係のないことだった。

会話が成立しているのは、今の彼が質問に対しても答えているだけだからだ。

もし彼に複雑な思考を行わせようとしても、今は無駄だろ。

「荷物と言いましたが、重たいものでも運べるのですか?」

レミリアが雇うことでも、使うのは咲夜だ。

その彼女としては、堤がどれくらいの能力を有しているか知りたいところだ。

もつとも、それほど過剰な期待はしていない。
筋骨隆々としてはいるが、成人男性並みの仕事ができればいいと思っていた。

空手に関しては、幻想郷では人里以外でたいした意味はないので度外視している。

しかし、彼女たちはすぐに堤城平に対する認識を改めることとなつた。

「400kgくらいまでなら、肩に担いだまま移動できる」

2人とも、固まっていた。

何の能力ももたない人間が、400kgも運べるというのだ。
サイズに限りはあるだろうが、逆に言えばサイズさえ間に合つていれば運べると言っている。

それが事実であるならば、堤はかなり重宝する。

紅魔館の庭の肥料の運搬に、大図書館の厄介な本の整理もまとめて頼める。

大規模な補修の際には即戦力になるし、家具の移動も彼1人にやらせれば済む。

雑務になってしまつが、雑務のエキスパートという意味では貴重な人材だった。

「フォークリフトはいらないわね」

こうして夜が明ける前に、堤城平の新たな日常が幕を開けた。紅魔館に住む唯一の男としての、新たな日常が。

しかし、その日常が彼にとって心地よくなるのは、もう少し先のことである。

ありがとう

僕が外来の客を迎えると言うのは、かなり珍しいことだろ？
人間とも妖怪とも商いはしているが、これは本当に珍しいことだ。
外来の人間が香霖堂に、しかも服を求めてきたというのだ。
先ほど来たメイドの伝言に間違いがなければ、の話だが。

「なあ香霖。この上下が一緒になつた服はなんだ？」

魔理沙が、これから来る客のための服の一つを両手で広げるようにして持つている。

そのサイズは彼女には少し大きすぎるため、服の裾が少し地面に垂れてしまっていた。

機能性と言うことならともかく、意匠の面からみればこの服を選ぶことはまずないだろう。

だから、僕は魔理沙に注意することもなく、それが何であるかを教えた。

「それは『つなぎ』と書いてだね、作業着の一種らしい」

その奇妙な構成からマジックアイテムの一種かとも疑つたが……買

いかぶり過ぎだつた。

分かつたのは『つなぎ』と『前』と『作業の際に身につける』といふこと。

能力まで使つたのに、ただの作業着だったといつには少し落胆した。

しかし、今日来る外界からの客人には興味がある。

もしかしたら、ここにある道具の使い方もいくつか分かるかもしない。

以前来た武芸者は、刀の目利きしかできなかつたからな。

この『フォーカリフト』や『インパクトドライバー』の使い方なんかは知つていくれると助かる。

守矢の巫女に聞いても、これらは専門的な道具だそうで使用法はわからなかつた。

さて、明日来るというシシリ君はどうだらうか？
僕が知らない道具の使用法を知つてゐるだらうか？

そんな期待に胸を膨らませながら、僕は少しだけ早く寝ることにした。

十六夜咲夜。

彼女の夜は遅くまで続き、朝は早くにやつてくれる。

妖精メイドたちが仕事に来る前に、いろいろと準備せねばならない。特別な仕事はないか、トラブルは起きていないか。

自分にしかできない仕事は終わっているか、何か予定は入っていないかつたか。

そういうことを、誰よりも早く起きて確認する。

そして、今日。

彼女がすべき仕事の一つとして、新たに紅魔館に仕えることとなつた人物の下準備がある。

堤城平だが、今のところ服らしい服がない。

紅魔館に来た時に来ていた空手着と、客人用のパジャマと礼装だけだ。

要するに、普段着と言つものが一切存在しないのだ。

そういうわけで、こじら口は礼装で過ごして貰つている。

しかし、彼は客人ではなく労働者として紅魔館に来ているのだ。これから働いてもらうというのに、そんなことでは大いに困る。だから、彼女は2日前に香霖堂に服を用意しておくように連絡しに行っていた。

男性用の普段着を、サイズ・デザイン問わず多目に出しておいてくれ、と。

でもって、今は堤を起こしに来たところだ。

初日は精神的に疲弊してそうだったが、最近は少しずつ生氣を取り戻していた。

彼女としては未だに不憫に思う部分もあり、ゆっくり寝かせておきたい気持ちもある。

だが、もう堤城平は紅魔館の預かりであるのだ。
厳しいが、いつまでも彼だけ特別扱いするというわけにもいかなかつた。

……紅魔館に来てから一週間後に勤務開始という約束なので、正確には2日後までは客人だが。

「ツツミ、もう起きてこらかしら

彼女の失敗は、ノックしてすぐさま扉を開けたことだらう。
そこには、レースのパジャマからパーティー用のスーツに着替えている堤がいた。

しかも、ピンポイントで下着一丁の姿を惜しげもなく披露している。
そんな堤の姿は、年頃の娘には少々毒であった。
が、そこはメイド長たる十六夜咲夜。

引き返しそうになつた足をなんとか踏みとどめて、堤に声をかけた。

「どうした」

せめて、羞恥心くらいは持つべきだと思う。

いつものように仁王立ちしている堤は、眉一つ動かさずに応答した。そんな彼にまだ慣れないのか、内心頭を痛めながら、平静を装つて咲夜は返す。

「朝食を食べながらになるけど、今から服を調達しに行くわよ」

「人里まで行くのか？」

「いえ。外界の服も扱っている店があるから、そこに行くの」

その店は『香霖堂』と書いて、外界から流れてきたものを扱う店だ。そう簡単に説明して、堤は納得してくれたらしい。

「そりゃ

と呟くと、また仁王立ちを始めた。

そんな堤を見て、咲夜は改めて堤に感心した。

鍛え上げられた体は、ただの人間とは思えないほど密度と質量が感じられる。

だが、決して固いだけではなく、不思議な柔らかさを秘めているようだ。

柔軟性と強靭さを兼ね備えた、そんな肉体だと素人目にも分かる。そんな肉体にも感心して、色々と大切なことを忘れていた。

「悪いが、着替えを続けたいから扉を閉めてくれ」

「……あら、『めんなさい』」

まさか、堤にダメ出しされるとは。

しつかりしなきや、と咲夜は自分に言い聞かせる。

まだまだ一日は始まつたばかりなのだ。

これくらいで疲れていては、あつといつ間に寝込んでしまひだらう。

扉を閉めながら気合を入れ直し、彼女は厨房へと向かった。

サンドイッチを食べながらの道中は、ながらピクニックのよいつであつた。

瀟洒な少女と屈強な男性の取り合わせはいかにも奇妙だったが、これはこれで微笑ましい。

……などといつことはなく、サークルでもなければ怪訝な視線で見てしまつだらう。

いくら堤がタキシードを着ているとはいえ、妙な取り合わせと言つことに違ひはなかつた。

文字通り、美女と野獸……メイドと餓狼である。

彼女はサンドイッチを5人分も作ってみたのだが、どうやら正解だつた。

咲夜が少し多めに1人半分。

堤が食欲を満たすべく3人半分。

これで丁度5人分だつた。

確かに咲夜は『遠慮しないで食べなさいね』とは言つたが、堤はホントに遠慮しなかつた。

彼女も学習したが、堤は言葉を真っ直ぐに受け取るらしい。『遠慮するな』と言えば遠慮しないし、『館から出るな』といったら本当に一步も出なかつた。

ここ数日の彼の行動は、睡眠と食事、排泄と入浴、それと館内の探索だけだ。

もちろん、地下牢を含めて、許可されていない場所には行つていない。

で、籠のカゴにサンドイッチを入れてきたのだが、邪魔になるからとメイド服のポケットにしまつた。

その光景を見た堤が『それは何だ?』などといつものだから、彼女は少し思案した。

そして、彼女の能力を知るものも知らぬものも納得できるよう『タネなしの手品よ』と答える。

堤も堤で『そつか』と答えるなり、それ以上のことは聞かなかつた。

そんなやうとりがあつてから、30分ほど歩いた時のことだ。流石に手持無沙汰になつたのか、咲夜から声をかけてみた。無難な話題がいいだうと、少しばかりの気も使って。

「ところで、昨日はよく眠れたかしら」

「初日に比べれば眠れている」

確かに、初日に比べれば顔色は大分よかつた。初日の朝など、一睡もできずに夜を過ごしてしまつたようで、少し朦朧としていた。

また、2日目も疲れなかつたらしく、少し足取りが怪しくなつていた。

その日の夜に、こゝそり睡眠薬を食事に混ぜておいたおかげか、3日目は眠りっぱなしだった。

で、彼はまだ紅魔館に来てから4日目だと思いつぶやく。

レミリア、咲夜、美鈴、パチュリー、小悪魔の5人で話し合つたが、訂正しないことにした。

今の堤に必要なのは休息である。

何だかんだ言つて、偶然とはいえ紅魔館に案内されなければ帰れたのだ。

堤が帰れなくなつたのはレミリアの影響が極端に大きいため、それを悔いての判断でもある。

無論、堤に万全な状態で働いてもらわないと困るところもある。

必要以上に、彼女たちの甘さが出てしまつただけの話だ。

「そり、ならよかつたわ」

「助かつてゐる」

短い言葉だが、それが不器用な堤なりの感謝である。
そんなことはもう、咲夜にもわかるよつになつていて。

しかし、香霖堂までは結構な距離がある。

いくら咲夜が有能だと言つても、途中で山道を抜けなければならな
いため少々厳しい。

本当は飛んでいきたいところだが、堤が飛べない。

堤を引っ提げて飛行する姿を想像すると、咲夜もそれをためらつてしまつた。

といつて、堤を抱えて飛んでいる自分が想像できなかつた。

「もう少し歩けば、店に着くから」

「わかつた」

半分は、自分に言い聞かせたようだ。

堤の短い返事に慣れてきた彼女は、一言も返さずに歩き続けた。
距離の取り方が分からぬ今は、いつするしかないのだ。

まあ、距離を取るといつ選択ができるようになつただけイイか、と
彼女は考へる。

香霖堂まであと一〇分。

早く堤に慣れようと思ひながら、彼女は無言でその道を行つた。

「ああ、こりゃしやい。彼が、外界から来たといつ……」

「ツツミ・ジョウハイだ」

咲夜よりも早く名乗りを上げた。

こいつこいつは律義な男である。

「ツツミくそ、僕が」Jの『香霖堂』の店主、森近霖ノ助だ。好きに呼んでくれて構わないよ」

『親しい者は香霖なんて呼ぶがね』と付け加えた、メガネをかけた優男。

一見すれば、柔軟ともとれるような外見と雰囲気を纏っている。この男こそが、今名乗りを上げた『香霖堂』店主、森近霖ノ助である。

妖怪にも人間にも属さない、というより、その両者のハーフだ。その特殊性ゆえに両者に平等でいられるのか、それとも彼の生来の性格なのか。

それは分からぬが、彼は客の素性にこだわらないといふのは間違いない。

例え外界から来た人間であつたも、客であるならば彼にとつて單なる客である。

綿パンもあれば革ジャンもあり、正装からカジュアルな服まで何でも揃っていた。

2つの大型のラックにこれでもかと掛けられた服は、店の窮屈感を否応なしに増した。

これほどの品揃えを期待していなかつたのか、堤だけでなく咲夜までも目を丸くしている。

「す」「いわね」

「言つただろ。大量に服が手に入つたつて」

確かに大量であつた。

堤に合うサイズの服がいくつあるかは別として。
いや、裾上げすればどうにかなるのではないか。

幻想郷の民からすれば大き過ぎる服ばかりが揃っている。
大体180cmから190cmくらいの人間が着る服ばかりだ。
だからこそ、裾上げだけで堤でも着用できるようになるのだが。

「今日は君らが持つていける分はタダで構わないよ」

「いいのか?」

「もちろん」

疑問を呈したのは、咲夜ではなく堤だった。

彼は、幻想郷に来てからまだ一週間も経っていないような状態だ。金も持っていないし、その代わりになるものも一切ない。

あるとすれば労働力くらいなもので、それもどの程度通用するかわからない。

だからこそ、どうして香霖がこのような態度を取るのか理解できなかつた。

「その代わり、少々手伝つてもらいたい」ことがあってね

少しもつたいつけたような言い方をするのは、癖なのだろうか。

そう言うなり倉庫の中に入つていく。

そして、1分も待たずに出でると、形の崩れた拳銃のような道具を握つっていた。

その道具が『インパクトドライバー』であると堤の知識が告げる。

「少し、僕の能力の説明をしよう。

僕の能力は『道具の名前と用途が分かる程度の能力』ですね。

そのおかげで、こうやって珍品堂を開いててもそこそこ客が来るんだ。

まあ、残念なことに、これでは『道具の使用法』がわからないんだけどね

そういうと、香霖は『こっちに』と堤と咲夜を促した。

半年前に立てた倉庫の中である。

その倉庫の中に流れ着いた品を貯めておくのだろう。

現に、その倉庫には堤にとって見慣れた重機があった。

「そこで、君に協力して欲しい。君の知っているものだけで構わない。

ここにある道具で使い方を知っているものがあれば、ぜひ教えて欲しい」

堤は困った。

何にかと言えば、道具の説明である。

インパクトドライバーに、フォークリフト。

重さの調節できるダンベルに、トレーニング用のゴムチューブ。
さらに、トランシーバーまでもが放置されていた。

「これは『フォークリフト』といって、人力で運べない荷物を運ぶ道具らしいんだが……」

使い方が分からぬ、ということだろう。

普通免許持つてるくらいじゃ操縦もままならない機械である。

幻想郷の民がそれをどうしようとするなど、不可能に近いことだ。

が堤にとつては、パツと見ただけで使い方の分かる道具だけなのである。

これらをすべて説明しようとすると、今日中に終わるかどうか微妙

なところだ。

簡単な道具がほとんどだが、フォークリフトこそが曲者。もし動くのであれば、一から説明せねばならない。

特殊な資格の必要なそれを、いかにして素人に説明するのか。基本的に口数の多くない彼からすれば、それは難題に違いない。

「これなら、電源さえ手に入れば操縦できるが」

当たり前のことだ。

いくらフォークリフト並みのパワーを持つているとはいえ、運輸会社勤務である。

フォークリフトの一つも使えないはずがなかつた。

「そうか……それじゃあ仕方ない。そちらのフォークリフト以外を頼む」

こちらの住民が使えない道具に興味はない。

そういうことだった。

件のインパクトドライバーについても同様だ。

車のバッテリーがあるものの電圧を変えられない堤には、使えないとした伝えられなかつた。

もちろん香霖はがっかりしたが、半ば諦めていたとのことすぐこ^トきを持ちなおした。

が、それはそれとして結構盛り上がつたようだ。

「「」のダンベルとやらねえ使つんだい？」

「「」の留め具を外して重りを付け外しして重さを調節する。あとは、「」の風に持ち上げたりすることで、鍛えたい部分に刺激を「」える」

「なるほど……思っていたより原始的な道具だつたわけか」

「原始的だが、身の丈に合つた重量にしないと怪我をしやす」

などと、思ったより会話が続いている。

咲夜はとこうと、茶器でも見ておこうかと棚に皿をやつていた。古くはあるが汚れてはいないうつわの中には、西洋風のティーセットが4つ。そして、中国茶を味わうときの茶器のセツトが一つ置いてあった。どちらも紅魔館に常備してあるものであり、これ以上置いておく必要もない。予備も十分にあるため、すぐに興味を失つてしまつ。

さて、では刃物でも見ていこう。

そう考へた彼女は、茶器とは反対側の武具の類が置いてある方へと

歩を進める。

古今東西雑多な武器があるが、彼女はナイフしか使わない。

それも、大きくても30cmを超えない程度のナイフだ。

投げて良し、切って良しの獲物でないと、彼女の能力も生かせない。一応回収はしているが、刀身が折れたりして使えなくなる場合もある。

20本くらい追加しておこうか、そう考えた時だ。

堤にも武器がいるのではないか？

不思議と、その考えによつやく辿り着いた。

『カラテ』という格闘技に加え、同じく『サンボ』『ボクシング』という格闘技も経験がある。

それがどんなものかは美鈴の知識とパチュリーの図書館で分かつた。全て等しく素手なのだ。

ボクシングに関してはグローブをはめて行うのが常識らしいが、それは武器ではない。

拳を保護するための道具であると、専門書には記されていた。

彼女が察するに、堤は人間としては相当強い。

恐らく、里の人間の誰と比べても遜色ない実力を持っているだろう。だが、弾幕ごつこなど望むべくもなく、妖怪よりは弱いに違いない。ルール次第では戦えないこともないが……正直なところ、戦力には数えられない。

彼の『素手』という戦い方を生かせる武器を調達する必要がある。今更ながら、そう思い至った。

刀剣類のコーナーから少し左に目をやると、刀剣以外の武器のコーナーが目に映る。

鎧を貫くために作られたツルハシのような武器や、一目でそれと分かる騎兵用のランス。

新機構を備えたボウガンもあれば、振ると飛び出す特殊警棒まで置いてある。

より取り見取りではあるが、これはどれも堤の性分に合わないと咲夜は直感する。

ナックルなども目に入つたが、これも論外だ。

堤は相手の体を掴んで行う技も使用する。

このような手の動きを極端に制限する武器は、かえつて堤の力を削ぐことになる。

発想は良かつた。

素手の戦いに近い武器。

しかし、これではダメなのだ。

もつと自由度の高い道具。

などと考えたが、ふと馬鹿馬鹿しくなった。

堤を戦闘要員ではなく、雑務担当として雇うのだ。

本人が希望するならともかく、こちらから武器を揃える必要もない。よくよく考え直し、道具の説明の進行状況を確かめようとした時だつた。

彼女の視界の端に、それが入り込んできた。
まるでそれも、運命であるかのように。

香霖の「また頼むよ～！」といつ声を背に受けながら、2人は帰路についていた。

咲夜が時計を見ると、まだ10時40分くらいである。

行きと同じペースでいけば、昼食の準備には十分間に合う時間だ。

とはいっても、館の雑務が終わっていないはず。

紅魔館に帰つてからも、咲夜は忙しくなりそうだ。

ちなみに、服は全部持ち帰ることとなつた。

咲夜が空間操作を行い、風呂敷で包んだ後にバスケットの中に仕舞いこんだのだ。

香霖が気にした様子はなかつたが、堤が少し申し訳なさそうにしていた。

また機会があれば、他の道具の使い方を説明しに行くという件は、堤からの提案である。

ところで、咲夜が持ち帰つたのは服だけではなかつた。

香霖からティーセットを一つと、堤のための武器を一つ。

当初の予定にはなかつたが、これらを購入していった。

堤はダンベルを名残惜しそうに見ていたが、それはいずれ自身の給料で買つてもらうことにしている。

ところが、地下に小さいながらもトレーニングルームがあるので、正直必要ない。

行きも行きなら帰りも帰り。

道程を半分まで踏破したが、堤も咲夜も無言だつた。
間が持たない、ということはない。

咲夜は沈黙には強いタイプだし、堤も余計なことは口にしない。
その性分ゆえの静寂であった。

「ありがとう」

「え？」

「ありがとう、と言つたんだ。今日は、本当に勉強になつたし、服の件も助かった」

だからだ、と言わんばかりに前を向いたまま堤は言い放つた。
あまりに突然のことでの、咲夜の思考が一瞬固まる。

だが、すぐに思い直した。

堤城平は不器用なのだ。

不器用で、そのくせ真っ直ぐなのだ。

前を向いたままなのは照れ隠しで、突然前置きもなしに言つたのも
言葉を探してたから。

そんなことに気付ける自分を少し褒めたあと、彼女も何か言つこと
にした。

何がいいだろうか？

そんなことは考えない。

決まっているのだ、何を言つべきか。

紅魔館の誰もが、もしかしたら彼に言わねばならない言葉。
時間が経つてしまつては、意味がなくなる言葉。

「咲夜でいいわよ」

その言葉を耳にした堤が、帰り道で初めて咲夜の方を見た。
いつも丸いリスのような目だが、そこには確かに感情がある。
驚き……純粹な驚きだけが、そこに詰まつていた。

「ファーストネームで呼びなさい。これから貴方は、私の仲間なん
だから」

満面の笑みとはいかないが、笑顔を浮かべて伝えた。

「ありがとう、咲夜」

堤の言葉は短い。

堤の言葉はシンプルだ。

だからこそ、その言葉は一切ブレることなく。

咲夜の心中に確かに届いた。

やつぱり真っ直ぐな男だ。

咲夜は笑みを崩さぬまま、彼を真っ直ぐ見据えた。

お互に笑みを浮かべて顔を見合させ。

そして、どちらともなく帰路へと足を伸ばした。

午後からも咲夜は仕事に忙しかったが。

とにかく、彼女にとつて今日はそんな1日だった。

紅魔館に来て、7日目。

つまり、堤城平にひとつでは6日目の朝。

咲夜、美鈴、パチュリー、小悪魔、堤の5人で食事をしている。
今日に至るまでに全員と出会って自己紹介も済ませたが、全員での
食事は初めてのことだ。

今日の朝食は和風である。

鮭の塩焼きに大根おろしを添えたもの。
ほうれん草のおひたしに鱈節をまぶしたもの。

豆腐とわかめの味噌汁は、塩分控えめの薄味になっている。
きんぴらごぼうには、貧血対策に鳥のレバーを蒸したものを碎いて
混ぜて。

マグロの山かけは、いちいち噛みちぎらなくてもよい絶妙なサイズ
にカットされている。

そして、メイド長が朝一で炊いた米は、ほのかな日の光を受けずとも輝いていたように見えた。

その量、実に15人分。

ここでの1人分は、人間である魔理沙基準の1人分である。

咲夜は少々多めに食事を取るし、小悪魔も人間よりは食べる。

この2人で3人分を超える食事が必要となる。

パチュリーは食が細いため、この3人で4人分と言つたどころか。

どこに栄養が行つてゐるのか、美鈴が3・4人分は食べる。

彼女の職務の過激さを考えれば不思議ではないが……女性にしては多いかもしれない。

そして堤が同じくらい食べる。

余りが出れば堤と美鈴が折半して吃るので、残飯は出ようもない。

もともと潤沢な資金を持つ紅魔館だ。

今更食糧問題と言つこともなかつた。

無かつたのだが。

「みんな揃つての食事と言つのも始めてよね

などと、パチュリーが言つものだから。

「そうですね～。レミコト様とフラン様も、一緒にできるといいんですけど」

などと、美鈴が言つてしまつものだから。

「フランとは誰だ？」

などと、堤が聞く羽目になつてしまつたのだ。

急速に空気は張り詰め、小悪魔なんかは味噌汁の熱さも忘れてしまつた。

美鈴は『しまつた!』という表情をしたまま固まり。パチュリーは何食わぬ顔をしたまま山かけを口に運び。残る咲夜は、茶碗を置いて頭を抱えていた。

「そうね……でもね、美鈴。お嬢様たちはこの時間、御就寝なさつてこるはずよ?」

「そそっそそそそでしたね! ええ、私つたらうつかりしてましたよ!」

美鈴の乾いた笑いに、咲夜はこれ以上の追及を諦めるほかない。

もともと、美鈴はフランの幽閉を快く思つてはいない。ことあることに、とまではいかないが、それなりの頻度でフランを地下牢から出そつと陳情する。

レミリアのみが反対で、咲夜もパチュリーも小悪魔も条件付き賛成とこう段階だ。

美鈴はわざとフランの名を出し、堤に興味を持たせて接触させようとしている。

そういうことも考えられる。

そして、その提案に対しても明確に反対できる論理は咲夜はない。レミリアが反対していると言えばそれまでだが、彼女が禁じているのはフランの外出のみだ。

それに、レミリアは『フランを堤に呑わせるな』とも発言していく。

黒に近いグレーな判断だが、咲夜は一つの決断をすることにした。

「まあ、どちらにしても頃合いよね」

その言葉の真意は、堤にのみ伝わらない。

他の3人の反応はまちまちだが、何をするのか大体理解したらしい。
そして、誰もがその意見に賛成であつたようだ。
特に反論もなく、皆の食事が再開された。

「堤、ちょっとといいかしら？」

今度はノックを忘れない。

いや、ノックしてから待つのを忘れない。

同じ失敗を何度も繰り返すほど、彼女とて無能ではないのだ。

「大丈夫だ」

という堤の声を聞いてから、扉を開いた。

堤は、いつも通りの普段着を着ていた。

香霖堂に行つた折にもらつた、外界の服である。

上下一体となつた、つなぎという名称の服。

真っ赤に染め上げられたそれを身に纏い、いつものよつて堤は仁王立ちしていた。

仕事用の服を着慣らしておくといつなぎで、1日2・3日、堤は外界の服を着ている。

とはいっても、それは基本的に同じ衣類に分類されるものだった。

『つなぎ』という名前の、上下一体の作業服。

外の世界にいた時もこれを着て作業していたから、愛着があるのかもしれない。

初日にこれを着てきたとき、咲夜は難色を示した。

確かに作業着として効率はいいだろうが、デザイン性は低い。

モスグリーンのそれは、味気と言つものが全く感じられない。

同じくレミリアもそれを指摘したところ、翌日は赤いつなぎを着てきた。

それに呆れた2人は文句が口から出ず、結果として彼の赤いつなぎ姿を容認することとなつた。

ハツキリ言つてしまえば、問題はなかつた。

洋館の前を中華服で守つてゐる美鈴の存在や、咲夜のメイド服。

こういつた奇抜な服の連中が多いのだ。

今さらつなぎ姿が1人増えたくらいで、何がどうとこつともない。

「さつき、食事中に『フラン様』といつ名前が出たのを覚えているかしら？」

「ああ」

……ちょっと返事が早すぎるのが気になるが、堤が覚えているということにしておいた。

覚えていないのを誤魔化した感じがするが、気のせいだと自分に言い聞かせる。良くも悪くも規格外な人間なのだから、いちいち気にしていては心が持たない。

なので、大事の前の小事として無視して話を進めた。

「レミリアお嬢様の妹なんだけど、ちょっと気難しいところがあつてね」

「ふむ」

「今日の夕方あたりに、挨拶に行つてくれないかしら」

「わかった」

やけに簡単に堤が受け入れたのは、何も知らないからだ。
咲夜としては、何かを教えてからフランと向き合つて欲しかった。
だが、彼に説明をしたらフランに会いたがらないかもしれないし、

無理矢理合わせたくもない。

卑怯はあるが、黙つて合わせてしまえば顔くじりには覚えると思つたのだ。

もちろん、トラブルはある程度予想できるが……」レで死んだら、どつちにしても近いうちに死ぬ。

それに、何となく堤なら大丈夫だといつ予感が彼女の中にあつた。

だから、フランに一人で合わせるなどといつ無謀なことを思いつき、提案したのだ。

過程はどうあれ堤が承諾したのだから、あとは事を進めるだけだ。

地下牢（地下室と伝えたが）の場所を教え、パチュリーに鍵をもらいに行くように伝える。

そして、服装はつなぎのままの方が気兼ねなく接することができるだろうと言つておく。

それだけを堤に伝えた彼女は、あとは堤が死なないことを祈るだけだった。

その日の夕方に至ることだが。

ロングのストレートの髪形をした妖精メイドから、クッキーのセットをもらつた。

ボブカットの妖精メイドからは、魔法瓶に入つた紅茶をもらつた。ポニーテールの妖精メイドは、火打石を堤の背中で打つてくれた。

なんというか、死に別れみたいな空気が館に漂つている。それ違う妖精メイドの視線は、憐みを通り越して慈愛に満ちていた。今にも『棺桶の中の花は何がいい?』とか聞いてきそうな不穏な空気だ。

パチュリーからもらつた護符を扉に近づけると、一瞬だけ扉が発光する。

彼女曰く、一時的に封印を解くことができるとかなんとか。要するに鍵みたいなもんだろ?という堤の認識は、決して間違つていなかつだろう。

実際、咲夜は『鍵を受け取るよ』と堤に伝えたのだ。形こそ変わつてはいるが、鍵は鍵だと直した。

ただ、その鍵は内側からではなく、外側から掛けられた鍵だと言つことには気づかない。

「入るぞ」

中に入っている人物について、ある程度の情報は貰っていた。

名前は『フランドール・スカーレット』といい、紅魔館の主たるレミリアの妹に当たる人物だ。

レミリアと違い、金の髪の毛と赤い瞳、七色の羽を持つ吸血鬼だそうな。

しかし、どうして地下に住んでいるのか、どういう人物かまでは聞いていない。

当然のことながら、どういう能力の持ち主かも。

結局、堤の想像するフランドール・スカーレット像はこうだ。

レミリアの髪の毛を金にして、目を赤くする。

そして、レミリアよりも少し幼そうな感じにする。

地下において一度もあつたことないのだから、男性が苦手なのかもしれない。

紅魔館が女性ばかりという事実も、そいつた推測をすることができた。

部屋に入つて堤が最初に感じたのは、冷たさと薄暗さだ。単純に空気が冷えており、照明の数が少ないから薄暗い。

いくら吸血鬼が日光を不得手とするからと言つても、少し異常であった。

現に、レミリアは夜間、ロウソクによる照明をバツチリ使つている。吸血鬼という種が『光』そのものを苦手としているわけではないの

は明白だ。

地下に行くまでにロウソク以外の光がなかつたために、闇に慣れるのが早かつた。

だから、彼は部屋の異常により早く気が付く。

家具らしい家具がないのだ。

机と椅子は申し訳程度においてあるが、本棚が存在しない。それ以外には、みすぼらしいタンスが一つ壁に沿つて置いてあるだけ。

女の子の部屋としては殺風景にもほどがある。紅魔館の主の妹でもある者の部屋が、このよつなぞんざいな扱いと言つのは不自然だ。

まるで、囚人を閉じ込めておくよつな部屋。

この部屋の中には、そんな雰囲気が立ち込めていた。

「誰？」

堤が紅魔館に来てから始めて聞く声だ。

幼そうな感じのする……レミリアとは違つが、近いものを感じる声。
鬱屈とした感情が染み込んだ、嫌な声だった。

「シシミ・ジョウヘイだ。一週間ほど前から紅魔館で世話をなつて
いる」

ツツミで構わん。

続けてそういうと、妖精メイドからの手土産を持ったままその場で
仁王立ちした。

と、声のした方から、確かめるような足取りで誰かが歩いてきた。
身長は低く、レミリアと同じくらいだろうか？

僅かなロウソクの光でもわかる金髪に、単色ではない羽が見え隠れ
する。

光が足りず瞳の色まで確認できないが、この人物がフランドールで
あると推測できた。

「フランドール・スカーレットか？」

その問いにすぐには答えず、その人影はもつと近づいてくる。
堤とほとんど密着するくらいこの距離に来て、よつやくフランの顔が
見えた。

レミリアよりも柔らかい印象を受ける田つきで、やっぱり肌は透き
通りに白い。

虚勢や傲慢との感じられない瞳は、外見に見合つた可愛らしさがあ
る。

顔の造形なども美少女そのものであり、そんな趣味のない堤の心が
揺れる。

彼女に会つてレミリアにはない何か。
きっと、それが堤の心を動かしているに違いない。

「フランでいいよ。えへつと……シシ//お兄ちゃん」

その瞬間。

堤は言葉や論理ではなく本能でそれを語りた。
フランにあって、レミリアにないもの。

それに連なる記憶が、堤の頭の中から掘り起された。

――――――――――――――――――――――――――――――――

それは、堤が丹波文七と闘うことになる3年前。

珍しく道場の連中の飲み会に付き合った時のことである。

飲み会と言えど社交の場。

当然、趣味の合うグループ同士で固まって飲んでいた。

静かに飲みたい連中は、そういうので集まって静かに飲む。
後輩に気を使えるような連中が速攻で酔い潰れていたため、そういう
う図式が出来上がっていた。

堤城平は、静かに飲みたい男である。

何か話そうにも話題がなく、聞きの一手に回るしかない。

しかも、返事は『やうのが』や『やうか』『そうだな』などで、話す方としては面白みはない。

そういうのが好きな連中は声をかけてくるが、そうでない連中は別で飲む。

例外として『一方的に話すのが好き』な奴がいて、その田はたまたまそいつと飲んだのだ。

「堤さん、僕はね、妹がいるんですよ妹が！」

「やうなのかな」

「もうホントにかわいくってねー、毎日一緒に寝てるんですよー。」

「やうか」

「こないだのピアノの発表会なんかも、妹が『お兄ちゃん……やうと見に来てね?』

な~んて言つから、つこつこ堤さんの試合の応援サボつて発表会行つちやいましたよー。」

「やうなのかな」

「昨日何か『お兄ちゃん、その、一緒にお風呂入る』なんて言わ

れちゃつて……。

なんていうか、堤さん。俺、堤さんに勝つたら妹と結婚しようって思つてるくらいで。

ていうか、いいですよね？ 堤さんに勝つたら、俺、妹と結婚してもいいっすよね！？

「わうだな」

ハツキリ言つてまともに聞いちゃいなかつたが、その会話が突然思い出された。

自分にも妹がいたら、そんな風だつたのだろうか？
フランを見て、そう思った。

『お兄ちゃん』とか言つて、堤に抱きついてくる笑顔のフラン。
『お兄ちゃん……わつと見に来てね？』とか言つて、発表会に来るよつにねだる上田遣いのフラン。
『おやすみ、お兄ちゃん』とか、恥ずかしそうに言つてから布団にもぐりこんでしまつフラン。

『お兄ちゃん、一緒にお風呂入ろ』とか、無邪気な催促をしてくるフラン。

『大会頑張つてね、お兄ちゃん』とか、心配そうな顔で見上げてくるフラン。

『大会頑張つてね、お兄ちゃん』とか、心配そうな顔で見上げてくるフラン。

るフラン。

『お兄ちゃんにばつかりするいー』とか、よくわからないといひで
ぐずるフラン。

『大きくなつたらお兄ちゃんと結婚するんだー』と、満面の笑みで
宣言するフラン。

そんなフランが妹であるとこいつ想像が、頭の中を駆け巡った。

――――――――――――――――――――――――――――

リアルじやない妹は、本当の妹とはいえない。

だが、リアルに存在しているフランは自分のことを『お兄ちゃん』
と呼んでくれる。

リアルに妹じやなくとも、リアルに存在している妹キャラは妹でい
いんじやないか？

世迷い事を考え出した堤を、心配そうに見上げてくるフラン。

そんな彼女の視線を感じ、堤はやつと『』が涙を流していることに気
付いた。

「……ねえ、シシミお兄ちゃん。どうして泣いてるの？」

「ジョウヘイと呼んでくれ」

「え？ 別にいいけど……本当に大丈夫なの？ ジョウヘイお兄ちゃん」

次から次へと溢れ出す涙を、堤は止めることができなかつた。

今更ながら無碍な青春を過ごしてきた自分が情けなくなつてきた。中学の時、ちょっととかわいーと思ってた近所のお姉さんに告白するんだつた、とか。

よく考えたら色気の絡んだ過去がこれくらいしかなかつたとか。とにかく、涙が溢れるには十分すぎる理由だつた。

よく考えれば、クマみたいな工藤といつ男にさえ可愛い妹がいるのだ。

可愛い子が自分を応援していると思つたら、工藤を応援すると知つた時の絶望感ときたら。

しかも、それが工藤の妹だなんて知つてしまつた時の敗北感ときたら。

延長1回が終了した時点で知つてしまつたため、延長2回目で競り負けてしまつた。

とりあえず、もし帰れたら工藤を事故に見せかけて殺そう。

そんな決意したところで、堤の涙はよつやく止まってくれた。

「すまない」

「あ、今度は鼻血出でるよ」

「大丈夫だ」

過剰な妄想で涙の代わりに鼻血が流れだしたが、こちらはすぐに止まつた。

伊達に鼻の軟骨が残つていなければある。

魔法瓶を持った左手の袖で鼻血を拭ぐと、堤は氣を取り直して用件を切り出した。

「今日は、フランと仲良くなつて思つて、一緒に遊びに来たんだ」

「え？ ジョウヘイお兄ちゃんが遊んでくれるの…？」

「ああ、お兄ちゃんと一緒に遊び」

普段の彼ならここまで口数は多くないだらう。

『今日はフランと遊びに来た』『ああ』で済ます程度の会話だ。なんというか、言葉の端々に堤の邪念を感じる。

いちいち『お兄ちゃん』と強調するあたりも、彼らしからぬ計略が見て取れた。

そして、丹波がいたらこう言つたに違ひない。

『堤、お前さん……笑つてやせ』と。

歯が剥き出しじでなくて微笑んでるのだが、どうせよ知り合いか見たら卒倒しかねない。

もししくは、堤がおかしくなったと思つて救急車を呼ぶ」ことなるだ
ら。

「何をして遊ぼうか？」

「えつとね、遊ぶんだつたらね」

フランの次の言葉を待つ。

普段の彼なら『何をして遊ぶんだ?』と聞を~~くわんす~~に聞き返すところだ。

が、今は妹属性にしてやられた堤城平。

言葉を探しているもどかしい時間でさえも、彼にひとつは楽しみで
しかない。

この男、今ならまま」との赤ん坊役でさえ完璧にこなすに違いない。
それくらい、堤は正常な判断力を失っていた。

だから、チャンスを失ったのだ。

「弾幕」につき

安全に逃げ切るためのチャンスを。

堤城平はお兄ちゃんなのか？

太陽の代わりに月の照る時間。

人間たちが寝静まる夜こそ、吸血鬼の1日が始まるとき。
だから、従者も雇より夜に気合を入れることが多くなつてくるのは
必然だ。

豪華絢爛とは言わずとも、充分な威厳と高級感を持つ一室。
そこが食堂ではなく応接間だと言われても、疑う者はいないだろう。
だからこそ、壁際に不自然に設置されているアナログテレビの存在
が際立つ。

その一室にあるアナログテレビが、厳かな雰囲気をブチ壊していた。

そこで食事をする者たちも、その館の主も気にはしない。
今、食堂と茶の間を兼ねている部屋で茶を楽しんでいるのは、レミ
リアとパチュリーの2人だけ。

美鈴は先ほど休憩を終えっぱかりだし、昨夜は年中働いているよう
なものだ。

たまにレミリアと茶を飲むこともあるが、パチュリーの手前でそれ
はない。

レミリアは今日も今日とて、優雅な雰囲気を醸し出せるように必要
以上に尊大だった。

無論、必要性がないので尊大な態度の行き先がない。

ただそこに偉そうに座つていては、まるで無能な王のようではない

か。

それに自発的に気付いたからかは知らないが、口元に運びかけたティーカップを置いて口を開いた。

「咲夜。ツツミはじうしたのかしら？」

話題 자체は何でもよかつた。

たまたまレミリアの頭の片隅に堤城平のことが思い浮かんだだけだ。ただ、そのたまたまが昨夜の肝を冷やしたのも事実である。

「はい、少々部屋の方で色々してもらつております」

レミリアが紅茶を嗜む傍らで、咲夜がいつも従順の手本のような態度で答える。

相も変わらず面の皮の厚いメイドだ。

具体的な内容まで話せないため、大分ばかしてはいるが。

ここでは主に嘘をつかないというのが、十六夜咲夜の美点の一つかもしれない。

もちろん、嘘をつかないだけで真実を語ったわけではないが。

「……具体的にはどういふことよ？」

訝しげな視線でメイド長を見る。

付き合いが長いだけあって、不審に思ったようだ。

確信には至っていないが、何か隠していると感じたらしい。

「レミィ、野暮なことを聞くもんじゃないわよ。

ツツミだって男なんだから、一週間もすれば溜まつたり溜まらなかつたりするものよ」

「……ああ、それもそうね」

正直よくわかつていながら、知識人のパチュリーの忠告を聞いておくのが無難だ。

そう判断し、咲夜の焼いたクッキーに手を伸ばす。

紅茶の味が殺されないように、やや甘さを抑えたクッキーである。それでも、レミコアの間食としては十分な味だった。

だから、というわけではないのだが。

レミコアの考えが浅かったのは、言うまでもない。

第5話『堤城平はお兄ちゃんなのか?』

弾幕^{だんまく}_じを挑もうとしたフランだったが。

堤の右手にあるクッキーの箱と、左手に持っている魔法瓶に気がついた。

ロングのストレートの髪の毛の妖精メイドが、たまに差し入れてくれるクッキー。

それと、ボブカットの妖精メイドが、内緒で紅茶を持ってきてくれる時に携行する魔法瓶。

その2つが目に付いたフランに気がついた堤は、せっかくなので間食を取ることを提案した。

で、妖精メイドたちから貰ったクッキーと紅茶で一息入れたあとのこと。

よつやく話は、弾幕^{だんまく}_じへと戻り始めていた。

「え? お兄ちゃん、弾幕^{だんまく}_じ知らないの?」

「すまんが、聞いたことがない」

幻想郷の基本ルールの一つである弾幕ごつごつ。

妖怪と人間の差を埋めるための取り決めである。

が、割と最近では『萃夢想ルール』などの変則形式のものも考案された

それでも尚、元来のルールが『弾幕』の代名詞であった。もちろん、フランの指す弾幕『』も元来のルールに基づくものだ。

「え？ と……弾幕『JURU』のはね」

少女說明中

「というわけで、人間と吸血鬼でも平等に遊べるのー！」

「なるほど。フランは説明が上手だな」

そう言つて、彼はフランの頭を撫でてやる。

妖怪と人間のハワイアンズ云々については知っていた。

必要である。

常に妖怪が勝つてしまつては、人間はいずれ滅ぼされてしまう。つまり、様々な不平等を少しでも減らすための案が『弾幕ごっこ』

なのだ。

「だが、すまない。俺は弾幕を作れないんだ」

「えーーー。」

頭を撫でられて気持のよさそうにしていたフランの顔が、突然の悲報に歪む。

泣きそうな顔になつてフランを見て、堤も居心地が悪い。
フランが駄々をこねてくれればあやしたりという選択もあるが、フランは哀しそうに俯いただけだ。
堤もビックリしようかと考えあぐねていたが、

「お兄ちゃんと弾幕、いい……したかったな…………」

と、フランが少しだけ拗ねたように言った。

その言葉と仕草が、妹属性に染まつた堤の胸を打つた。

どうにかしてフランを満足させてやりたい。

その想いが、工業高校をギリギリ卒業したレベルの彼の頭に名案を「えた。

「フラン、じつこののはじうだ？」

変則ルール、弾幕鬼ごっこ。

堤城平は弾幕を作ることができない。

つまり、従来のルールではフランに 対してダメージを『えられない』
また、飛行もできずスペルカードも持っていないため、ゲームが全
く成立しない。

この事態を避けるための折衷案が『弾幕鬼ごっこ』である。
フランは通常の弾幕と同じく、堤に 対して弾幕を張る。
ただし、空は飛ばないという条件付きだ。
堤は弾幕を通り抜けてフランに触れればよい。

一度触れる度にゲームを一旦終了し、堤は開始位置に戻る。
それを確認してからフランが弾幕を張り、次のゲームを開始する。
そして、ゲームをより公平にするために、今回はスペルカードを使
用しない。

5回クリアした時点でゲームは終了、堤の勝利となる。

しかし、ゲーム中に堤が被弾した場合はどうするのか?
それについては、堤が倒れるまで勝負するということで合意となつ
た。

つまり、被弾しても倒れない限りは敗北ではないのである。

ルールの取り決めが30分ほどの時間で済んだのは、フランが妥協したからに他ならない。

いくら彼女とて、一方的になぶつて遊ぶ趣味はあまりない。標的は反撃してきてこそその標的で、出来る限り公平な条件で勝負したいのだ。

もちろん、能力的な差異に関しては仕様がない。

これは、個々人の天性のものや努力による差であり、それを楽しむのも醍醐味である。

ルールによる不公平が、彼女にとって最も遊びをつまらなくするものと言えた。

場所は、先々月に完成したフラン専用の弾幕練習所だ。

ぐずつては部屋を破壊していたため、下手に修理するより頑丈な部屋を作る方がいいのではないか？

そういう話が一部妖精メイドから持ち上がり、咲夜の決断とレミアの許可で作られた。

内側に効果のある結界によって、フランの弾幕の威力は若干落ち、壁に被弾しても壁が壊れない。

全力を出すと流石に紅魔館が揺れるが、その揺れも微細でたいしたことないと判明している。

まあ、フランと堤が遊ぶにはちょうどいい場所であるとも言えた。

「じゃあ、行くよー！」

「よし来い！」

距離にして30㍍程度だろうか。

フランが堤に対して、割と突破が簡単な弾幕を張る。小手調べといふこともあるし、堤に簡単に壊れられても困るからだろ？

避け方は非常に簡単で、斜めに走ればそれだけでかわせるような単純なものだ。

もちろん、走る速度に注意せねばならないが、気を付ければ歩いてもかわせる速度だから問題ない。

しかし、堤はフランの予想を大きく裏切った。

斜めに走るどころか真っ直ぐ向かってきたうえに、細かくジグザグに走ってきたのだ。

真正面にいたら直撃するはずの球を全て避け、最短距離を最速で迫つてくる。

そして、あつとこう間にフランに柔らかくタックルを決めてしまつた。

堤城平。

この男、その動体視力を以つて学生時代は弾幕系シューティングに興じていた時期もある。

無論、空手が第一ではあったものの、たまの休みなどは財布片手にゲームセンターに行っていた。

なかなかゲームオーバーにならないため、不良に絡まれたのも彼にとってはいい思い出だ。

そうすれば、確実に懐が温かくなるのだから。

つまり、イージーモードレベルの弾幕など、彼の足元に遠く及ばない。

「うわあ！ お兄ちゃんスッゴーイ！」

笑顔の堤に高い高いをされながら、フランは素直に喜ぶ。

『イージージャ話にならない 本気出せる』と短絡的に考えて。そんな彼女だからこそ、一気にハードモードまで試そうと思つたのかもしれない。

少し名残惜しそうに開始位置に戻る堤の背中を見て、フランはサディスティックな笑みを浮かべた。

――――――――――――――――――――――――――

「……咲夜。何か騒がしいとは思わないのかしら？」

「ツツミによく言ひ聞かせておきます」

「当然だが、レミコアが怪しみ始めた。

そりやそりだらう。

わざわざから継続的に紅魔館が揺れているのである。

しかも、地震の類と言つよりは、爆発や衝撃による揺れに感じられる。

いぐりなんでも、その程度のことが分からぬほどレミコアも愚かではないのだ。

「案外、レミコアのことでも考えながら七転八倒してゐるんじゃないかな
しら？」

口元を少しだけ歪める様な、意地の悪い笑顔で言い放つパチュリー。

「それは、複雑ね」

苦虫を噉み潰したような、そんな表情で一言。

それ以降、しばらくの間、レミコアは堤のことを考えるのを放棄した。

同時に、この揺れの原因に關しても忘れようとしたのは、パチュリーの言葉の賜物に違いない。

――――――――――――――――――――――

フランの顔に浮かんでいるのは、外見不相応な妖艶な笑みだつた。既に4回目の敗北を喫し、あと1回の敗北で彼女の負けが確定する。そんな状況だからこそ、楽しくて楽しくて仕方なかつた。

既にルナティックになつてている弾幕だが、堤城平はまだ立つてゐる。

無論、無傷ではない。

顔面はボツコボコになつてゐるし、つなぎの下もアザだらけだ。打撲の数こそ少ないものの、一つ一つのダメージが大き過ぎた。被弾すること11回、ピチョンせずに耐え切つた彼の体の構造はいかほどのものか。

とりあえず、フランドール・スカーレットの要求に応えられるレベルだったのは間違いない。

何より、かつてないほど堤の闘争心は燃え上がつていた。
……丹波が見たら、愕然としそうなほどに。

「こぐよーー、ジョウヘイお兄ちゃんー！」

彼女らしからぬ気合いを乗せ、フランは弾幕を放つ。イージーモードとは比べ物にならないほど密度と広がり、そして緻密さ。

これらの要素が、堤城平を無傷では済ませなかつた。スペルカードなしあはいつても、簡単に突破できる弾幕ではない。

「っしゃあああああああー！」

それほどの盛り上がりを見せる中でも、堤の田的は確かだつた。

田の前の弾幕の突破が目的だつたか？

弾幕に直撃しても倒れないのが重要だつたか？

もちろん、そうではない。

堤城平の田的は『フランドール・スカーレットと楽しく遊ぶこと』だ。

加えて、可能なら『フランの頭をさりげなく撫でる』こと。も田的の1つである。

すでに2回撫でているが、あと一回は撫でおきたいとか考えている。

……こんな姿を松尾象山に見られたら、確実に破門になる気合の入り具合だ。

迫りくる弾幕を見てはいなー。

放された瞬間に、ある程度の予想はできていた。

流石にフランも学習したのか、直線コースの弾幕は厚い。

いかに堤が頑丈とはいっても、正面突破で耐えられるものではない。彼の残りの体力から考えて、5発の直撃までならどうにかといったところだ。

堤が向かつたのは、左の壁際だった。

比較的ダメージの少ない右半身を盾にすることで、弾幕を突破しうとういうのだ。

最低限の回避は行つが、もはやフランの弾幕は堤の技量を超えてい

る。

ある程度は当たることを前提に考えねば、敗北は必至であった。

12発目の衝撃は、堤のレバーを襲つた。

龜人間・工藤に匹敵するほどの一撃の重さ。

もし堤が斜腹筋を鍛えていなければ、今の一撃で肝臓が破裂してい

ただろう。

現に、今も破裂こそしてはいないが、堤の体が途端に鉛のように重くなつた。

彼ほどの猛者を一撃で追い込むほどの威力が、フランの弾幕には秘められている。

だが、堤もただ打たれているわけではない。

弾幕に当たつたときの反動を利用して、再びダッシュするタメを作り出す。

足をキックチリと踏みこらえ、膝のバネを利用して力を溜める。

直撃した弾幕が霧散した瞬間、堤の体はカタパルトで射出されたようになに彈けた。

直線には走らない。

今、サイドステップを繰り返しながら……横の移動の繰り返しで弾幕を避ける。

隙を見つけては少しだけ進み、決して焦つて直線的な動きはしない。

が、次の衝撃は堤の予想していなかつたところから来た。

その弾幕は部屋の端まで行つたところで反射するように戻ってきて、堤の背中を打つたのだ。

予想外のその一撃に、堤のスタミナは削ぎ落される。

Kのされないよう歯を食いしばつたものの、そのダメージは大きい。

もはや、あと一度の直撃に耐えられるかどうかと言つたところ。たつたの一撃で、ここまで追い込まれてしまった。

しかし、堤もただでは転ばない。
後ろからの衝撃を利用して、賭けに出た。

弾幕といつもの、通常3次元構造をしている。
でなければ、飛行できる連中からすれば上下に簡単に避けられてしまふからだ。

今回はどうだらうか？

飛行できない堤城平といつ人間を相手に、フランが3次元的な弾幕を張るか？

無論、否。

フランドール・スカーレットは、平面上に弾幕を張つていたにすぎない。

堤に対して、立体的な弾幕を張る必要性がなかつたから。

堤は、その隙をついた。

大きく弓なりになつた体で、勢いよく丸まるよつこして前進のエネルギーの足しにする。

熊に殴られるような衝撃をもつた弾幕に逆らわず、そのまま吹き飛ばされる。

上方に向かって逃げることで、一時的に弾幕から逃れたというわけだ。

一気にフランのところまで行きたいが、まだ少しだけ遠い。

もちろん、堤はそこまで予想していた。

予想と言つよつば、本能に近いものだったのかもしれない。

フランまで、あと8mほど。

彼は弾幕を両足で踏み込み、尋常ならざる跳躍をした。

そして、一気に8mの距離は縮まり。

やや崩れ落ちるよつこして、なんとかフランに抱きついた。

「俺の、勝ちだな」

その顔は腫れていながらも、清々しい笑みを浮かべていた。包容力と温かさを持ち併せながら、力強さを秘めている。笑顔を向けられた者に安心感を与える様な、そんな笑みだった。

そんな笑みが向けられるのは、フランにとって初めてのことだった。ほとんどの者は彼女のことを恐れ、笑みさえ向けてくれることはない。

メイド長の十六夜咲夜の笑みは、どことなくぎこちない。門番の紅美鈴の笑みは、優しいが堤のそれとは質が違う。パチュリーに至っては笑顔を見たことがないし、実姉のレミリアともあまり会っていない。

過去にココに来た霧雨魔理沙の笑顔に近いが、それとも何か違う。

その笑顔に、フランは身動き一つ取れなかつた。

驚きと興味と嬉しさと疑問。

様々な感情が入り乱れ、過ぎじてきた時間に不相応な精神を搔き乱す。

混乱に陥るところであつたが、そんな彼女の頭に武骨な手が乗せられる。

その手で撫でられると、不思議どおりでもよくなつた。

深い安心感に包まれながら、彼女も堤の首元に両腕を回した。

「ところどころがあった」

小悪魔に擦り傷の消毒をされながら、頭を抱える咲夜に堤は全てを話した。

満身創痍もいじとくで、骨折している箇所がないのが不思議なくらいである。

つい、2時間前のことである。

あまりに地下が騒がしいため、レミリアもフランに何か関係したことだと思い至つたらしい。

美鈴に行かせたところ、そこには萌えぬきた堤と満足げなフランがいた。

幽閉の原因たる扉が開いたにもかかわらず、フランは飛び出す様子もなく。

ただ、楽しかったと笑顔で伝え、堤を美鈴に手渡した。

美鈴は美鈴で、気配を殺しながら地上の階に戻り、堤を客間に押し込めた。

レミリアの追及には『妹様が癪癥を起していまして……』と適切に話を付けた。

無論、堤の不在を怪しんだレミリアは彼を呼んだが。

先ほどと同じように『堤はお楽しみ』的なことを咲夜に伝えられ、しぶしぶと追及を諦めた。

で、美鈴の独断で小悪魔に消毒と包帯、ガーゼを用意させて治療していた。

そこに茶菓子の片付けに来た咲夜が通りかかり、今に至るといつわ

けだ。

「ツツミ、明日からの仕事に支障はないかしら？」

「大丈夫だ。だが……」

どこか遠くを見つめて、堤はゆっくりと口を開く。
何かを悟ったような顔は、何か常識を超えたものを感じさせる。
咲夜も、美鈴も、小悪魔も。

誰もがそれを感じた為に、堤が想いを口にするまで動きを止めた。

「フランの頭をどれだけ撫で撫でしたか、確認しておきたかった」

この男は、絶対に紅魔館から出してはならない。

3人が固く誓い、お互に確認し合つ。

必要以上に結局の固くなつた紅魔館だが、近い将来知ることだらう。

堤城平という男の愚直さ、力強さ。

そして、この男がいかに我を通す男であるかを。

凛々しい顔の男と、見事麗しい女。

身長差が少々広いが、それでもなお、美男美女というのは映えた。その2人の両方が腰に刀を刺し、男は袴袴で、女は縁を基調とした洋服で闊歩していても。

女の横には人玉が浮いており、男の左腕は青白く生氣に欠けた色だ。

男の方が荷物持ちらしい。

『E c o B a g』と表記された、薄茶色の布袋を2つ左手に提げている。

その大きさ、膨らみ具合から察するに、決して軽くはないだらう。だが、男は顔色一つ変えずに袋の取っ手を握りしめている。

女の方はと言ひつて、手持無沙汰に後ろに組んだ指を弄んでいた。男の方をちらと見ながらも、やはり同じように歩くだけだ。

真つ直ぐ前を向いて歩き続ける男に何か言いたいのだろうが、それさえもおぼつかない。

それから5分経つて、ようやく女が口を開いた。

「あの、1つくらい持ちますよ?」

「構わん。指の鍛錬になる」

それは間違いないのだろうが、女の気遣いは男に届かなかつた。

少ししおげた顔になつた女だが、申し訳なさそうな顔に早変わりする。

そんな表情のまま、また男に『氣を遣つよ』つたことを言へ。

「源之助さん、あまり無理しないで下さこよ」

「わかった」

女……魂魄妖夢は知らない。

男……藤木源之助の双眸が爛と輝き、感情の高ぶりのあまり鼻血が出来やつになつてゐることを。

第6話『白玉楼の侍 / 紅魔館の餓狼』

「あとは、フラン様に洋菓子でも買つて行きましょつか」

「そうだな」

堤城平が紅魔館に来て40日ほど。

フランとの『弾幕鬼』から、1ヶ月ほど経ったときのことだ。その後、堤の妄言は一度も確認されなかつた。

フランと遊んだ際の傷も2週間ほどで完治し、かなり重たいものを運ばれていた。

最大で280kgのピアノを運んだが、壁にもぶつけず1人で運んで見せた。

毎日の重労働にも文句一つ言わずに働く忠臣に、レミリアが買い出しを命じたのだ。

気分転換を兼ねてのことと、緊急時の買い出し要因として道を教えておくためである。

レミリアとパチュリーはともかく、小悪魔も咲夜も人里に気軽に買いたい物と言つわけにはいかない。

特に、咲夜はメイド長として館内を仕切らねばならず、そうそう館を開けられない。

よつて、新入りの堤にその役目を託そつと考へたわけだ。

そして今日。

美鈴は堤を引き連れて人里に来ていた。

たまの休みに中華料理を食いに來たりしている美鈴なら、人里にもそこそこ詳しい。

加えて、今日は珍しく魔理沙が本を正当な手続きの下に借りに來たので、門番が不要だつた。

門の前までノリノリだつた魔理沙が、突然簞を降りて『本を借りに來た』と言つた時はビックリしたが。

とにかく、暫定で一番厄介な危険がなくなつたので、今は代わりに

小悪魔が門番をやつしている。

「えっと、何を買つてこきましょうね」

「痛みにくいものがいいが、生菓子も食べさせてやりたいな」

なんとか会話できるようになつてきた、と思つ美鈴である。
最初は何を考えているかわからなかつたが、

だが、彼の行動を見て、すぐに『何も考えていないことが多い』と
分かつた。

会話しそうと思えばできるようで、最低限の『//コニケーションは
とれている。

ここ最近は、武術の話なんかもしたりして、いよいよ同僚らしくな
つてきたところだ。

フランの話で盛り上がることもあり、少しばかり親近感を持つたり
もしている。

「ケーキつむわけにはいきませんよねえ」

「タルトかパイあたりなら大丈夫じゃないか?」

そこまで会話が進んだところで、堤の視線が2人組に移つた。
凜々しい男と、可愛らしい女の子の2人組だ。

腰の刀やら人玉やら不可思議なところはあるが、幻想郷ならよくあることと思っていた。

事実、小悪魔は羽や尻尾が生えているし、チルノだってよく見れば羽のようなものがある。

今さら、「人玉」ときでは堤は動搖しなかつた。

「桜餅は前回買つて行きましたから、今回はどうしまじょつか？」

「芋羊羹なら、幽々子様も喜ばれよう」

堤たちと似たような会話をしていた2人は、彼らに気付いたらしく見知った顔であるし、無碍にするのも失礼だと思ったのだろう。足並みをそろえて、2人は堤らの元へと歩いてきた。

「ああ、美鈴さんじゃないですか」

「お久しぶりです。いつも宴会ではお世話になっています

これはこれは、と言わんばかりに2人も頭を下げ出す。もともと腰の低い連中であればこそだろう。

普段はあまり話さないが、いざ話しうとそこそこ話が続くのだ。

2人とも、庭を任せているという共通項があるからだろう。

「藤木源之助」「元老」

「堤城平だ」

こちらはひらりで、無口で朴念仁といつ共通項がある。
お互い表情が変化しないため、今すぐ殺し合つても不思議じやなさ
そうだ。

藤木はすぐに抜刀できるだらうし、堤も戦いの機微に關しては聰い
男だ。
どちらか仕掛けてもおかしくはないが、どちらも仕掛けることはな
かつた。

その程度の常識は持ち併せている2人である。

「そりゃ、時間があるなら、少しあ茶しませんか？」

「そうですね、たまにはいいですよね」

「ふらんじーる・すかあれつと?」

「紅魔館の地下に住む……レミコアの妹だ」

フランに思い当たりはない藤木だが、レミリアは見知っていた。日傘の下で宴会を楽しんでいる、吸血鬼と呼ばれる存在。年齢以上に幼い外見と言つことからも、妙に記憶に残っている。堤が、そのレミリアの妹のことを『とってもかわいい』などと称すのだ。

流れかけた冷や汗を拭いつつ、藤木は聞かずにはいられなかつた。

「それなるは幼女ではござらんか」

「ロココンじやない」

「ちょっと早過ぎだ。

『幼女』の辺りでもう否定し始めているのだ。
もしかしたら、本人も自分の性癖に薄々気づいているのかもしれない。

空気が妙になつていて、それを藤木も感じたのだろう。

何か話題を変えねば、そう思つて話題を提供したに違いない。

口下手な彼が口にしたのは、彼と堤が共通の話題として知つていそうなもの。

以前、腕試しに殴りこみに行つた紅魔館の住人の話だつた。

しかし、彼が知つてゐるのは、自分が倒した小悪魔と、門番の紅美鈴。

それと、同じく妖夢と親交のあるメイド長、十六夜咲夜である。小悪魔のことはよく知らないし、美鈴はそこにいる。

よつて、彼が話題に選べるのは、咲夜以外にはなかつた。が、咲夜に関しても、藤木は詳しいわけではない。

とつあえず、噂や盗み聞きしたことから話題を捻りだすことにした。

「紅魔館のメイド長は、確かシンテレであつたな」

藤木にとつて、「これは唯一無二」と言つていい情報であつた。メイドの話など今更だし、美脚がどういつつとセクハラになりかねない。

PAD疑惑に関しても、紅魔館を敵に回す可能性から口にするにはばかられる。

この程度の話題なら、無難と言えば無難なかもしれない。

だが、藤木は知らない。

堤城平とこう男が、いかに「ノリコニケーションが得意か」ということを。

「やうだ

短く返して、それで終わり。

普通だつたら『どこがシンデレであるか』など話題が広がりそうなものだ。

違うにしても『本当はひといつ性格なんだけど』とか、話しようはいくらもある。

しかし、堤城平はそんな男ではない。

必要な情報を手短に伝え、最速で話を終了させる。

特に、男相手とあらば、必要以上に会話をしない男と進化していた。

しかし、堤にも手心はある。

微口リの妖夢とも仲良くなるため、藤木ともソーシャルの親交を持つことにした。

「俺もシンデレが怖い」

「さよか」

返せる返事が、それしかなかつた。

といふか、それが精いつぱいだった。

そもそも藤木はシンデレ好きではない。

『も』などと言われては、対応に困るのも当然のこと。

藤木源之助が好きなのはシンデレではない、クーデレだ。

藤木源之助が400年のうちに得た技法の中に『聞き流し』という技法がある。

これは、あたかも相手と会話しているかのように見せかけるのが常であり。

その実、話すだけ話させて自分は聞かないと言つ性質を持つ。

稗田に『藤木源之助が聞きに回つたら用心せい』と云えられるほどだ。

だがしかし、今宵の相手は餓狼。

一介の人里の民どいか、稗田と比べても勝るやも知れぬ存在。藤木の『聞き流し』は、大きく空振つていた。

「チルノを知つていいか?」

「氷精のことじがねいわ」

「チルノと遊ぶのに必要なのは、飴玉と昼食、そして根気だ」

こんな感じの会話を、女性2人が会話の終わる1時間近い時間聞き続けた。

その藤木の心境はいかほどのものか。

これが、堤城平と藤木源之助の初めての邂逅である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8764/>

東方餓狼死狂伝

2010年10月10日14時27分発行